

論 說

II Khan 国史料に見られる Qarānās について

志 茂 碩 敏

はじめに

II Khan 国に関する最も重要な史料の一つである Rashid al-Din の『集史』<sup>(1)</sup>や Wassaf の『国士の分割と歲月の推移』<sup>(2)</sup>の中に Qarānās という語が見うけられる。この語は、一方では II Khan 国の軍団の名に冠されているかと思えば、また一方では Khurāsān 地方における叛乱者の集団や、Fars 地方に侵寇する暴徒の集団の名としても用いられている。しかしながら Rashid は Qarānās が何者であるかについては全く述べないが、Wassaf も「Qarānās は最も勇猛なモンゴル人で、人間というより悪魔のようなものである」と非常に曖昧に記しているだけなので Qarānās の本体が何であるのか全く判然としない。また一方、Marco Polo の『旅行記』には Kirman 地方の盜賊として Carānās の名が挙げられている。<sup>(3)</sup>これらペルシヤ語史料に記されている Qarānās

II Khan 国史料に見られる Qarānās について 志茂

と何らかの関係があると思われるが、「Il Khan 国東方边境の掠奪者」という点で共通するだけであり、「Il Khan 国の軍団とはすぐに結びつきそうには見えない。

つまり、諸史料に見られる Caratunas, Caranunas は、その名が等しいこと以外には一見して共通する要素が極めて乏しいのである。中でもヘルシヤ語史料に記されている Caratunas は、その活動も、活動地域も、活動時期も多岐にわたり、しかもそれが断片的に記されている為、とりとめがなく扱いにくい。その為か、従来ヘルシヤ語史料に出てくる Caratunas を総合的に考察した者は全くいなかった。D'Ohsson は原史料の Caratunas という語をそのまま引用しているだけで Caratunas に関する特別な考察は行っており、わざわざ Marco Polo の『旅行記』中にも Caratunas に関する記事があることを指摘したに留り、<sup>(6)</sup> Hammer-Purgstall は Caratunas を Caratun Jidun と結びつけて考えたが、それ以上見るべき記述は行っていない。<sup>(7)</sup> Howorth もこれら先人の諸説を紹介しただけで特に自説は述べていない。<sup>(8)</sup> また、近年でも Spuler<sup>(9)</sup> や Boyle<sup>(10)</sup> は Caratunas の名を挙げるのみで何の考察も行っていない。

結局、従来の Caratunas に関する研究と云えば、わざわざ Marco Polo の『旅行記』中の「盜賊 Caranunas」に関してなされたものがあるにすぎない。これらの中で最も有力なものは『集史』の記事に拠った Yule の「Qanqrāt 部族<sup>(11)</sup>の一支派で Caratun Jidun に因んで Carantūt と名づけられていた氏族が Il Khan 国内に万戸を形成していたが、これが東方边境を本拠として盜賊化し、Carantūt が訛って Caratunas となったのではないか」という説である。しかしながら『集史』を見ると、Caratun Jit 氏族は「Qanqrāt 部族考」中で Qanqrāt 部族の一支派としてそ

の名が挙げられているだけで、<sup>(13)</sup>それが II Khan 国内で万戸を形成していたという記事は全く見当らない。また、II Khan 国の中核となつたのは Hulagu の遠征に際して各王家の軍隊から一定の割当てに応じて選抜された部族軍であつたが、<sup>(14)</sup>Qanqrāt 部族の一支派である Qarantūt 氏族から万戸を形成するほどの兵員が選出されたとは考え難い。それに Qarātūnas に関する多くの記事を残してゐる Rashid 自身が Qarantūt と Qarātūnas との関係について全く触れていないのも不自然に思われる。要するに、最も有力な Yule のこの説と、<sup>(15)</sup>Qarantūt と Qarātūnas との音韻上の類似によつてなされた思いつきの域を出ない。他の諸説も大同小異であり、Yule を含めてこれらの諸説には、ペルシヤ語史料に多岐にわたつて記されている Qarātūnas を、総合的に、適確に解明し得る説得力が無いといえよう。

このように、従来の Qarātūnas 研究には Marco Polo の記事を中心に考察した極めて曖昧なものしかないが、一方では II Khan 国の軍団の名に冠されて用ゐられ、一方では辺境を侵襲する II Khan の対立者とも記されてゐる Qarātūnas に関する問題は、単に Marco Polo 『旅行記』中の一挿話として考察されるべきものではなく、II Khan 国史上の重要問題の一つとして捉えられるべきであり、その究明は、ペルシヤ語史料、わけでも『集史』の断片的で、しかも多岐にわたる扱ひにくい史料を、整理し用いてはじめて可能になると思ふ。そしてまた、Marco Polo の記事も、『集史』の記事とあわせて考察することによつてより良く理解されるべきである。

さて、それでは Qarātūnas の本体は何ぞ、彼等の多岐にわたる活動は II Khan 国史上いかなる意味を有するものであるか。『集史』の記事を中心としてそのかを論じてみたい。

第一章

既に述べたとおり、『集史』の Qarātūnās に関する記事は断片的で、しかも多岐にわたっている為、これらの記事からいさなり Qarātūnās そのものを論じることが出来ないので、Qarātūnās に関する記事を整理しながら論を進めていきたい。

第一節

『集史』の「部族考」中に二ヶ所、Qarātūnās の万户長 (amir-i tūmān-i Qarātūnās) という語が見うけられる。

まず、「Mankqut 部族考」に<sup>(15)</sup>

《Tūlūi 家の千戸長<sup>(15)</sup>、Mankqut 部族の Jadaī Nūyān は Uktāi Qān の時代まで存命し、Surquqtani Biki や Tūlūi Khān の息子達の身边に仕えていた。(中略) この國 [Iran, Il Khān 國]<sup>(16)</sup> には Jadai Nūyān の後裔には Ghazan Khān の有力アミールである、Qutluqshah Nūyān の父と Mankqut 部族の千戸長 Mankqudai がいた。Mankqudai の兄弟の Hūlqūtu Qurji は半鐵軍 (amir-i kezik) の Qarātūnās の万户長でもあった。

また、「Idürkin 部族考」に<sup>(17)</sup>

この部族は Saldūs 部族の支派である。Jankkiz Khān の時代、彼は Uuk Khān と戦つて退却し、Baljūna

△湖▽地方に来て使者を *Ünk Khan* のもとに派遣し、多くの手紙を与えた時、既に前の話で述べたように、その使者となつたのがこの部族の者で、*Hargai Jün* という名であつた。(中略) この国 [*Tian, Ü Khan* 国] では、*Khurasän* の *Badghis* 地方<sup>(21)</sup> *Qarānās* の万戸長であつた *Hindu Brikji* が *Hargai Jün* の一族<sup>(22)</sup>、彼のいとこ筋の者であつた。

これらの記事から二人の「*Qarānās* の万戸長」*Halguta Qurj* と *Hindu Brikji* の名を知ることが出来る。しかしながら、*Hindu Brikji* が *Badghis* 地方に駐屯したこと、*Halguta Qurj* が怯薛長でもあつたことがわずかに知れるのみで、一体「*Qarānās* の万戸長」とはどのような性格のもので、いつの時代のものであるか等具體的な事については全く判らない。

「*Qarānās* の万戸長」という語は『集史』中、右に挙げた「部族考」の二つの記事にしかないが、諸「本紀」<sup>(23)</sup>中には *Qarānās* の万戸軍 (*tūmān-i lashkar-i Qarānās*) とか、*Qarānās* の万戸 (*tūmān-i Qarānās*) という語が見うけられる。おそら<sup>(24)</sup>、この *Qarānās* の万戸<sup>(25)</sup>の支配者が「*Qarānās* の万戸長」であつたと想像されるので、「本紀」中に見られる *Qarānās* の万戸に関する記事を整理し、「部族考」に記されていた二人の「*Qarānās* の万戸長」とどのように結びつくかを考察してみたい。

まず「*Ahmad* 紀」に次の様な断片的な記事がある。<sup>(24)</sup>

(一) *Baghdād* に冬<sup>(26)</sup>、*Siāhkuh* に夏<sup>(27)</sup>、*Abāqā Khān* 直屬の軍隊が、*Abāqā Khān* の諸本<sup>(28)</sup>に仕え

Ü Khan 国史料に記される *Qarānās* のこと 志茂

Qarāūna の万可軍、云々。

また、一二八四年、Ahmad Khan と争ひつ Khurāsān 地方は軟禁せられた諸王 Arghūn が、救出せられた Ahmad Khan 復讐の終 Adherbaijān に至つた時の事を記した同書「Ahmad 紀」の記事は次の様に見える。<sup>(87)</sup>

①諸王をムハンマドはAhmad Khān の有力ムハンマド、Ahmad を殺さん、Isfahān の長官(shahna)の Bura を Siakhūh 地方に送つた Qarāūna の万可のものと遣ひ、「田軍して Ahmad を捕えんや」と知らせた。(中略) Bura が Qarāūna の万可のものと到着すると彼等も即座に田軍し、Ahmad 田軍して田發つた。(中略) ②一方、Ahmad は Sharūyāz を經つ口のホメに居たが、Shiktūr Nūyān に捕えられ、監禁せられた。③(中略)その後、突然 Qarāūna の軍隊が到着し、Ahmad の諸ホメを掠奪し、諸ホメは死の他に何の跡形も残らなかつた。そこで、Qarāūna 諸王 Ahmad の母 Qūtūi Khātūn、Ahmad の妃 Tūdāi Khātūn, Arment Khātūn を捕ひ、彼等のうち十人々 Ahmad の見張りたもつた。

そこで、これと同時期の事を記した『Wassāf 史』の記事は、<sup>(88)</sup>

①Ahmad を捕つた、Arghūn が Muslimi の近へに到着した時、Qarānqāi [Qarābūqāi (『集紀』)] と Shiktūr が Qarāūnās の軍隊と共に Sulfān、Ahmad を經つて連行し、Arghūn を田軍にきた。<sup>(89)</sup>

この、一二九五年、Khurāsān 地方から Adherbaijān 地方に進軍した諸王 Ghāzān と Bārdū Khān とが対決し、結局両者のファミリー達が会合して協定が結ばれた時の事を記した「Ghāzān 紀」の記事の中に次の様に見える。



Abaga Khan の諸オルドに仕えるものである。

(2)・(3) 一二八四年、Khurasān 地方での軟禁から救出された諸王 Arghūn が Ahmad Khān を迎へて Adher-baijān に居た時、Shāhkūh に駐屯してゐた Qarānās の万户が Arghūn に協力した。

(4) Arghūn Khān 直屬の采配に入つてゐた Qarānās の万户は、Amīn Tughachar と共に Baghdād を冬营地としており、諸王 Baidu がこれに同行してゐた。

(4) 一二九五年、諸王 Ghazān と Baidu Khān とが協定を結ぶ、Qarānās の万户は Tughachar 共々 Baidu Khān の支配下に入ることが決められたが、この頃、Qarānās の万户は Shāhkūh に駐屯してゐた。

これらを総合すると、Qarānās の万户というのは次の様に云えると思ふ。即ち、「本来は Shāhkūh を夏营地、Baghdād を冬营地とする Abaga Khan 直屬の軍隊で、Abaga Khan の諸オルドに仕えるものでもあつたが、Abaga Khan の歿後はその息子の Arghūn に協力して Ahmad Khān 追はつゝ、Arghūn の即位後は Arghūn Khān 直屬の采配に入り、Amīn Tughachar に支配されて前代同様、Shāhkūh, Baghdād に駐屯して、Baidu Khān の時代に及んだ。そして一二九五年、Ghazān と Baidu Khān との協定で、以前からこの万户と關係の深かつた Baidu Khān の支配下に入る事が決定された」と。

## 第二節

さてそれでは、前節で挙げた「部族考」の記事で、「怯薛長で Qarānās の万户長となつた Hulqutu Qurji」



「Khurasān の Badghis 地方に駐屯する Qarātūnas の万戸長 Hina Britkin」とあつた二人の「Qarātūnas の万戸長」達は、ふも整理した「Khan 直属の Qarātūnas の万戸」とどのような関係があるのであろうか。

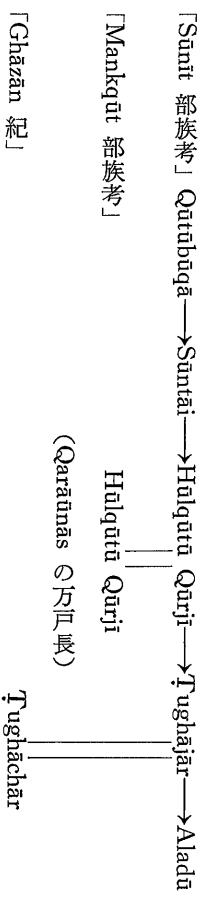
この問題については Tului 離國時代（一二二七—一二二九年）の Jurmāghūn の Iran 遠征に<sup>(38)</sup>加わつた万戸長千戸長達を列挙してゐる「Sunit 部族考」の記事中に次の様を記されてゐる。<sup>(39)</sup>

◀Jurmāghūn の遠征に加わつた▶他のミールは Jaghatāi Kūchek ひあつた。その頭<sup>(38)</sup> ▶Inkkitz Khan の息子<sup>(39)</sup>の▶Jaghatāi が歿したのでその名を継ぐひ、その後 Jaghatāi Kūchek のひよを Sunit 部族の者ひあつたので Sunitai と呼んだ。▶彼は▶はつめ千戸長ひあつたが、Tughājār の父 Qutubūqā が歿すると▶Khan は▶彼の地位を Sunitai と与へた。（甘略）Sunitai が歿すると彼の地位を Manqūūt 部族の Qutluqshah Nūyān の父 Hulgūta Qurji と与へた。そして Arghūn Khan の母<sup>(39)</sup> ▶その地位を▶Tughājār と与へた。そして Islam の王 Ghāzān Khan がそれを Aladu と支配せよた。

これは、一二二八年、Tului 離國時代の Jurmāghūn の Iran 遠征に千戸長として参加し、その後の Hulagu の遠征時にも活躍した Sunit 部族の Sunitai が、Qutubūqā の歿後その地位を受け継ぎ、Sunitai の後その地位は Manqūūt 部族の Hulgūta Qurji と受け継がれ、その後 Arghūn Khan 母<sup>(39)</sup>は Qutubūqā の子 Tughājār と、やゝ Ghāzān Khan 母<sup>(39)</sup> Aladu と受け継がれた事を記したものであろう。

このとき Jurmāghūn 遠征時の千戸長 Sunitai が Qutubūqā の後受け継ぐた地位が何ひあるかは記されてゐないが、このときひあつたミール達のなかで「Manqūūt 部族の Qutluqshah Nūyān の父 Hulgūta Qurji」

が、*マングウト* 部族考」の「*Qutughshāh Nūyān* の父 *Mangūdāi* の子 *マングウト*、*法蘭* 長と *Qarānās* の万户長となつた *Hulqūta Qurjī*」に次いで *Argūn Khān* の時代は *Hulqūta Qurjī* の地位を継いだ「*Tughajār*」が、*マングウト* 部族考」の「*Ghāzān 紀*」の「*Arghūn Khān* 直屬の采邑に入つてゐた *Qarānās* の万户を支配した *Tughāchār*」に次いで *マングウト* は明瞭なので、この「*Sunīt 部族考*」の記事が、第一節を整理した「*Khān* 直屬の *Qarānās* の万户」の支配者である「*Qarānās* の万户長」の変遷を記したものであることは疑問の余地がなく。



この、*マングウト* *Siakhūh* を夏管地、*Baghdād* を冬管地とする「*Khān* 直屬の *Qarānās* の万户」の五人の「*Qarānās* の万户長」の名と、その在位の順序とが知れたわけだが、この中で「*Mankqūt 部族考*」に挙げられてつづいた *Hulqūta Qurjī* の名は見出せなかつた。「*Idārkin 部族考*」の「*Khurāsān* の *Badghis* 地方に駐屯する *Qarānās* の万户長 *Hindu Britkijī*」の名は見出さなかつた。「*Khān* 直屬の *Qarānās* の万户」は *Siakhūh*, *Baghdād* をそれぞれ夏管地、冬管地としたという。一方、「*Qarānās* の万户長」*Hindu Britkijī* は *Badghis* 地方に駐屯し

たという。それでは Hindu Brikji が支配した Qarūnās の万户は、「Khan 直屬の Qarūnās の万户」とは全く別のものではあらうか。それとて Hindu Brikji が Badghis 地方に駐屯したとしようのは、Khan のオルズがたまたま Badghis 地方に移動した時のことを記したもので、Hindu Brikji が「Khan 直屬の Qarūnās の万户」の万户長の一人だったのではあらうか。

この疑問に答えるためには、やゝと判明した「Khan 直屬の Qarūnās の万户」の五人の万户長達と、Hindu Brikji の年代や行動を考証して両者の万户の性格を考察し、両者が直接結びつくか否かを確認していかなければならぬ。

まず、「Khan 直屬の Qarūnās の万户」の五人の万户長から見に行こう。彼等のやゝ Arghun Khan (在位一二八四—一九一年) 時代に万户長になつたとしよう。Tughachar は、やゝと挙げた「Ghazān 紀」の記事から、一二九五年、Ghazān が Baidu Khan と争つた頃でもその地位をいついていた事が知られている。ただ、彼が万户長になつた時期はいつかは『Wasaf 史』中、Ahmad Khan (在位一二八二—一八四年) 即位直後のことを述べた記事の中(88)に

《諸王 Arghūn は Tughājār に鼓と旗を与えて万户長とした。そして Qarūnās——悪魔の性質を持つたものである人間ではなく、モンゴル人の中で彼等ほど勇猛な者はいない——の軍隊は Tughājār の監督下に入った。

と記されてゐるので、やゝは Ahmad Khan 時代のいつかとも考えられる。しかし、「Ahmad 紀」によると Tughachar が Arghūn が Ahmad Khan と戦つた後、Badghad での Ahmad Khan の手のものに捕えられて

Tabriz に降参られたところ、Arghun が Ahmad Khan を倒した後に救出されたので、<sup>(85)</sup> 彼は Ahmad Khan 時代に「Qarūnas の万户長」になつてゐたとしても、この時代に「万户」を支配する機会はほとんどなかつたと考へられ、実質的に彼が「Qarūnas の万户長」となつたのは、『集史』に記されてゐる Arghūn Khan の時代に、<sup>(86)</sup> 彼が Arghūn の即位直後のことと考へられる。ふちれてこつて Tughachar が Arghūn Khan の即位前後から Ghazan Khan の即位の直前まで「Qarūnas の万户長」の地位を占つたことはまず間違ひなきところである。また、彼の後 Ghazan Khan 時代にその地位にいつたと云ふ Aladū についてもその時代ははつきりしてゐる。問題なのは Tughachar の前任者三人の在位の時期とその行動とである。彼等に関する記事は極めて乏しいが、幸いなことにおよその見解はつけられる。

まず、Tughachar の前任者 Halqutū にいつては「Abāqā 紀」に唯一の記事がある。回曆六七七（一二七七一七八）年、Herāt の Kurt 家<sup>(87)</sup> の長 Shamus al-Din Mahmād Kurt が Tabriz で処刑された時の事を述べた次の記事がそれである。<sup>(88)</sup>

「Shamus al-Din Mahmād Kurt の処刑後」Abāqā Khan は次の様に云つた。「彼は狡猾な男だ。ひよつとすると逃亡する為に死んだふりをしてゐるのかも知れない」と。《その為》側近の Amir-i masās Halqutū が出かけて行き、彼の棺に強く釘つけして埋葬した。

この記事により Halqutū が Abāqā Khan の末年、一二七八年頃、「側近の Amir-i masās」として Abāqā Khan の身边に仕えていた事が判る。

また、Halqutu の前任者 Suntai と同じく『Wassaf 史』中、一二六九年、Khurasan 地方に侵入して来た Chaghatai Khan 國の Baraq の軍隊と Adherbatijan 方面から親征した Abaga Khan の軍隊が戦った時の記事<sup>(9)</sup>に、Suntai Nuyān は馬から下りて椅子の上で座り、次の様に云った。「今日、戦場において困難に耐えようとする<sup>(10)</sup>兵員達<sup>(11)</sup>各自に、俺が何か云うことがあろうか。何もない。ただ戦うあるのみだ。各自の運命<sup>(12)</sup>については神が知っている。また、Chinkiz Khān の<sup>(13)</sup>御心<sup>(14)</sup>が知っている<sup>(15)</sup>我々はここに命を投げ出して敵に向つていこうか<sup>(16)</sup>はなにか」と。

ともいつ、一二六九年の Baraq の Khurasan 侵入時、Suntai が Abaga 軍の中心にあつて活躍したことを知る。

ちつ、續つて Suntai の前任者 Qutubāga とあるが、彼と同じく「Barin 部族考」に<sup>(17)</sup>

《Tului 家の千戸長 Ukar Qalja, Qutūs Qalja の一族<sup>(18)</sup>》<sup>(19)</sup> Tāmūga Nuyān の千戸、大マミールで名の高かつた Qutubāga Nuyān 云々。

とあつて、彼が Barin 部族の有力アミールであつたことが判るが、年代は記されていない。一方、「本紀」中には彼に関する記事は「Abāga 紀」に唯一ヶ所あるだけであるが、その記事により彼の年代をはつきりと知ることが出来る。

それ<sup>(20)</sup>は、Abāga Khan (在位一二六五—一二八二年)即位の一ヶ月後の Qipchāq Khān 國軍との戦いに関する次の記事である。

經王 Yashmut 乃<sup>(21)</sup> (中略) 《R Abaga Khan の<sup>(22)</sup>命令<sup>(23)</sup>に、Qipchāq Khān 國の<sup>(24)</sup>Nūgāi を擊攻する為  
II Khan 國<sup>(25)</sup>兵<sup>(26)</sup>と闘ふは、Qarūnas 乃<sup>(27)</sup> 中略

進軍した。そして Kur 河を渡り、Aqsū と呼んでゐる Chaghan Mūrān で両軍は遭遇した。双方軍勢を繰り出して戦い、両軍とも多数の者が殺された。そして Tughachar Aqa の父 Qutubqa はその戦闘の中で勇猛に戦い、遂に殺された。

この記事により、一二六五年の Qipchāq Khan 国軍の侵入に際し、Qutubqa が Abaqā 軍の中心となつて活躍し、戦死した事が判明する。

つまり、Tughachar の前任者として記されてゐた Qutubqa, Suntai, Hūqūtū の三名の万戸長達は、これら Abaqā Khan の身边に仕え、重要作戦では Abaqā 軍の中核となつて活躍してゐたことが判る。そして彼等三谷の年代は、一二六五年、Abaqa Khan の即位直後から、その末年の一二七八年頃まで、<sup>(43)</sup> また Abaqā Khan (在位一二六五—一二八二年) 一代に及んでおり、これは、「Qarānās の万戸は Abaqā Khan の直屬軍で、Abaqa Khan の諸オルドに仕えるものである。」と記されてゐた「Ahmad 紀」の記事と一致するものである。

さて、これで「Khan 直屬の Qarānās の万戸」の五人の万戸長達のだいたいの活躍年代が判明したわけだが、彼等の部族名についても、既に述べて来た様に、Qutubqa, Tughachar, 親子が Barin 部族、Suntai が Sunit 部族、Hūqūtū が Mankqut 部族のメンバーであることが判明してゐる。また、Aladū についても後にも述べるが「Tatar 部族考」に Tatar 部族のファミリーとして名が挙げられてゐる。<sup>(44)</sup> これらを合せて、「Khan 直屬の Qarānās の万戸」の万戸長達は次の様に整理される。

- (1) Qutubqa (Barin 部族)。一二六五年、Abaqa 軍の中核として Qipchāq Khan 国軍と戦つて戦死。

- (2) Süntai (Sünt 部族)。一二六九年、Chaghatai Khan 國の Barāq の軍隊との戦いで Abāqa 軍の中核として活躍。
- (3) Halqutu (Mankqut 部族)。一二七八年頃、「側近のアミール」として Abāqa Khan の身边に任えていた。
- (4) Tughachar (Barin 部族)。一二八四年の Arghun Khan の即位前後から、一二九五年 Baidu Khan の時代までその活躍が確認された。
- (5) Aladu (Tatar 部族)。Ghazan Khan (在位一二九五—一三〇四年) 時代に万戸長の地位についた。

これから以上の諸点が指摘できよう。

- (A) Qutubūqa と Tughachar が Barin 部族のアミールで親子だが、他は総て異った部族のアミールである。
- (B) Süntai, Halqutu, Tughachar にはそれぞれ息子がいたことが「部族考」の記事から知られるが、万戸長の地位は息子のものとでは移つていゝなう。<sup>(46)</sup>
- (C) Qutubūqa の後、息子の Tughachar が万戸長となつたが、これは父の戦死後二十年、二代の万戸長を経てからのものであつた。

つまり、「Khan 直屬の Qarānās の万戸」の万戸長の地位は、ある特定の部族や家系に世襲されるものではないかといふ言へる。

それでは、万戸長の地位についたのはどのような者達であらうか。既に挙げた「Mankqut 部族考」の記事から

知られるように、Halquta は「法韓長」でもあつたが、彼については、やはり既に挙げた「Abaga 紀」で、「Abaga Khan の『側近のフミール』と記されており、彼が Abaga Khan の「法韓長」であつたことはまぎれもない。

また、Tughachar について「Ahmad 紀」<sup>(46)</sup>

Tughachar (中略) Qunchaqbal その他の Abaga Khan の親衛兵 (kezirkian) 達や従者達、云々。

とあつて、彼もまたもとは Abaga Khan の親衛兵であつたことが知られる。

これらの事を考え合せると、一般の万戸長、千戸長が部族長と軍司令官を兼ねて、その地位が世襲であつたのに対し、「Khan 直属の Qaratus の万戸」の万戸長と云ふのは、「Khan 直属の采邑に入つていた Qaratus の万戸の支配権を委任されたフミールで、Khan 側近のフミールがその任にあたり、その地位は原則として世襲ではなかつた」と云えると思う。そして、乏しい史料から考察した限りにおいては、これら「Khan 直属の Qaratus の万戸」の万戸長達は Khan と密着した行動をとつており、彼等の万戸の駐屯地も、さきに挙げられていた Siakhul, Baghdad 以外に特には見当がつかない。また、Badghis 地方との結びつきも特には認められなかつたと云える。

### 第三節

さて、上述のようだが、「Khan 直属の Qaratus の万戸」と Badghis 地方との結びつきは特には認められなかつたが、従つて Badghis 地方駐屯の「Qaratus の万戸長」Hindu Brukir の年代と行動とを考証し、「Khan 直属の Qaratus の万戸」との関係について論じてみよう。さきに挙げた「Hidurkin 部族考」には彼の年代については何



も述べていないので、これについては「本紀」の記事に拠らねばならないが史料は乏しい。しかしながら二、三の記事がある。

まず、一二五八年の Baghdad 攻撃時の事を記した「Halagu 紀」の記事の中に次の様に見える<sup>(47)</sup>

町の有力者達が「Halagu のもとに」やつて来て次の様に慈悲を乞うた。「多くの者達が恭順の意を表わしています。彼等に恩恵を与えて下さい。」と云いますのは、Khalifa は息子達を「人質として」送り込んで、自身も出頭しようとしているからです」と。この話の真際中、矢が有力アミールの一人 Hindu Britki の眼に飛んで来た。「この為」Halagu Khan は非常に激怒した。

この記事から Hindu Britki が、一二五八年の Baghdad 攻撃時、有力アミールの一人として Halagu の身边に仕えていたことが判る。

また、一二八二年 Abaga Khan の歿後、Ahmad の即位が決つた為、諸王 Arghun が Kurasan 地方に帰還して来た時の事を記した「Ahmad 紀」の記事で以下の様である<sup>(48)</sup>。

「Arghun が」Mazandaran に着つた時、Igachi Nuyan が一万の軍隊と共に出迎えに来た。「Arghun は」二万の軍隊と共に Amuya 河畔の守備にあたつて来た Hindu Nuyan を召喚し、彼等に次の様に云つた。「私の父は存命中、私を召喚したので私は命令に従つて軍隊を従えずに出発した。《ところが》Atherbaïjan に着いた時には父は既に歿しており、Khan 位に関する取り決めは終了してしまつていた。私は軍隊を所持していなかったのです、やむを得ずこれに同意しなければならなかつた。今や、お前達アミール達が私を助けて剣の力

をもつて父の王座を勝利者〔Ahmad Khan〕の手から取り戻してくれるなら、お前達の努力に感謝しよう。』（中略）《これに對して》Hindu Nūyān は次の様に云つた。「狀況は皇子のおしやるとおりかも知れないが、Ahmad はあなたを目下<sup>(8)</sup> Ahmad があの地方〔Adherbaijān〕の Khān 位に上つたというなら、あなたもこの地方〔Khurāsān〕に命令を出したらよいではないか。Khān 位に上つてはこの老骨の云う事をお聞きなさい。Ahmad と争つてはなりません。もし Ahmad があなたのもとに《兵を》向けて来たならば、我々しもべが死を賭けても対処いたしましよ。」

ここに、「二万の軍隊を率ゐて Amūya 河畔の守備にあたつていた Hindu Nūyān」と記されている人物が、「Hidarkin 部族考」の「Khurāsān の Badghis 地方に駐屯する Qarānās の万户長 Hindu Brikji」に比定されることはまず間違いない。右の記事は Ahmad Khan 即位直後の一二八二年のもので、Hindu Brikji が、有力マイルの一人として Baghdād 攻撃に加つた時点から二十四年が経過しており、自ら「老骨」と述べているのはそのためであらう。

さて、「Qarānās の万户長」Hindu Brikji は、一二五八年 Baghdād 攻撃時に Hulagu の身边にあつたマイルで、一二八二年 Ahmad Khan の即位直後には二万の軍隊を率ゐて Amūya 河畔に駐屯してゐたことが明らかになつたが、この一二八二年といふ年は、「Khān 直属の Qarānās の万户」の第三代万户長 Hulqūtū Qūrī の行動が知られている一二七八年と、第四代万户長 Tughachar がその地位に上つたと考えられた Arghūn Khan 即位直後の一二八四年との中間に位置する。既に述べたとおり、一二八四年、Khurāsān 地方で Ahmad Khan 一派

に軟禁をせられた Arghūn が、赤田をたじ Ahmad Khān 駐屯を向いた時、Siāhkūh に駐屯してゐた「Khān 直屬の Qarātūnās の万戸」が Arghūn に協力した。この時の万戸長の名は記されていない。Wassāf の云うやうに、第四代万戸長 Tughachār が Ahmad Khān 時代に万戸長になつてゐたとしても、既に述べた通り、彼は Arghūn の Ahmad Khān 駐屯をたじせず Tabriz に監禁されてしまつており、この時期に、彼が Siāhkūh 駐屯の「Khān 直屬の Qarātūnās の万戸」を指揮したと云ふことはあり得ない。とすると、この時「万戸」を指揮してゐたのは、一二七八年頃の行動が知られてゐる第三代万戸長 Hūlqūtū Qūjī であつたかも知れない。しかし、史料が乏しく、彼であつたという確証はない。一方、やゝに述べたように、一二八二年 Ahmad Khān の即位後、Adherbajān から戻つて来た Arghūn は Amūya 河を離れて「Qarātūnās の万戸長」Hindū Brikījī と Ahmad 打倒を以つての協力を要請したが、Hindū Brikījī は、Ahmad と争うべきでない事を述べて協力要請を断つた。しかし、「Ahmad Khān が Arghūn をたじて兵を向けた時、彼は死を賭けてもこれに対処しきじやう」と請ひあつたのである。とすれば、一二八四年、Arghūn が Ahmad Khān 駐屯を向いた時、Arghūn に協力した Siāhkūh 駐屯の「Khān 直屬の Qarātūnās の万戸」と云ふのは、Hindū Brikījī の率ふる「Qarātūnās の万戸」のことである。つ、「Khān 直屬の Qarātūnās の万戸」と、Hindū Brikījī の率ふる「Qarātūnās の万戸」とが同一のものであるという可能性もあると云へる。次に、両者が同一のものであるか否かを明らかにする為に、一二八四年頃の記事に見られる「Qarātūnās の万戸」及び、Hindū Brikījī の行動からそれらの考証を進めて行かう。

一二八四年、Arghūn は Ahmad Khān の先鋒軍と Abhar 地方で小ぜり合ひをし、その後 Khurāsān 地方に逃

れたが、結局 Ahmad Khan の本隊に追われて捕えられ軟禁された。しかし Ahmad Khan の有力マニールの一人の裏切りで救出され、Ahmad Khan 追討に向つたのである<sup>(57)</sup>。この時、Siākhrah 駐屯の「Khan 直屬の Qarātūns の方戸」が Arghūn に協力したことは既に述べた通りだが、これを先立の三・四月月程前、Arghūn が Abhar 地方で Ahmad Khān の先鋒軍と戦つた直前の事を記した「Ahmad 紀」の記事だ、

Arghūn は「Arghūn Aqā の下」Nūrūz のもとで、「我前の支配にせよ、一万の Qarātūna の軍隊と共に後から来るもの。」使者を出し、Hindu Nūyān とせよ、Qarātūna の「軍隊と共に」出軍を「要請した。」と記さる<sup>(58)</sup>。

この記事から Arghūn が一二二二年の約束通り、Ahmad Khān の軍隊の進軍の際、「Qarātūns の方戸長」Hindu Būtkīn と出軍を要請してつたことが判る。そして新たに、Hūlāgn の遠征時の「Khurāsān 総督」Arghūn Aqā の下 Nūrūz の「Qarātūns の方戸」を支配してつたことが知れる<sup>(59)</sup>。

そして Abhar 地方で Ahmad Khān の先鋒軍と小ぜり合ひをした Arghūn の一隊はその後東方に向つたが、彼等が Lei 方面に着いた時の事を記した同じく「Ahmad 紀」の記事に次の様なものがある<sup>(54)</sup>。

「Arghūn は」我々が、我々の軍隊や兵站に到着し、そして、かの地方から Qarātūna の軍隊が我々に合同して来たならば、もし背後から Ahmad の軍がやつて来ても Jājarām の下にある Kālpūsh で彼等と戦おう。この様にうまへ事が運ぶとどうのなるらうとして家の中に入れて馬を休めておけよう、と考えて「東方へ」引き返して行つた。そして Damghān に着くと Qarātūna の軍隊の姿は見当らなかつた。と云うのは

《Qarātūna 達は途中で、Argūn の軍隊が敗れた」と聞き、その為引き返してしまい、その途中、掠奪を行っていたからである。

また、これと同時期のことを記した『Wassaf 史』の記事には次の様に記されている。<sup>(56)</sup>

その時 Qarātūnās の軍隊が到着したが、皇子 Argūn の状況を知ると帰還した。そして彼等おきまりの非道を始め、猛烈な破壊と掠奪を行った。そして Damghān 周辺に火を放つて荒掠した。

これらの史料に記されている「Damghān と Argūn と合同やちを引を返した Qarātūnās の軍隊」が、Hindu Britkji の支配下のものか、Nūruz の支配下のものかは明示されていないが、ともかく Argūn の協力要請に応じてなかつた「Qarātūnās の軍隊」があつたことは確かである。

Hindu Britkji に関する記事は、Argūn が彼に出軍を要請したことを記したものの「Ahmad 紀」の記事を最後に、『集史』中には現われなかつたが、D'Ohsson の『蒙古史』に見え、<sup>(57)</sup>「Ghazān 紀」の中に次の様な記事がある。

《かゝつて Argoun の武將の一人 Hindu Noyan は死刑を恐れて Khaissar 《城》に逃れた。彼の引き渡しを要求された Schems-ud-din はこれを従ふ、その代償として Argoun から裝飾品を渡した Khilāt 衣と鼓と旗を受けとつた。Schems-ud-din はこれをひたかくしてしていたが、Hindu 一党の怨みを招き、(中略)彼の Khaissar 要塞から決して出ないように決心した。

上記の記をよむと Hindu Noyan が、『集史』の「Qarātūnās の万民長 Hindu Britkji (Hindu Noyan)」と

比定される事は間違いないであらう。そしてこの「Hindou Noyan」が死刑を恐れて Khassar 城に逃れた、云々」とあるのは、Ahmad Khan の進軍に際し、前約に反して Arghun の協力要請に応じなかつた為、Arghun の即位後その罪に問われたからに違いない。そして彼は Kurt 家の Khassar 城に逃れたが結局捕えられたわけである。つまり、ちぎて挙げた「Ahmad 紀」や『Wassaf 史』に「Arghun に協力せず Damghan を荒掠して引き返した Qarānās の軍隊」とあつたのは、Hindu Birkiji が率ふる「Qarānās の万户」のことであると考えられる。一方、Shahkuh 駐屯の「Khan 直屬の Qarānās の万户」が、一二八四年 Arghun が Ahmad Khan を追つた時 Arghun に協力し、Arghun の即位後彼の采邑に入つたことは既に述べた通りであり、「Khan 直屬の Qarānās の万户」と Hindu Birkiji の支配する「Qarānās の万户」とは、何らかの關係はあるたしう、ともかく別のものであると云ふべき。

そのこの事は、「Khan 直屬の Qarānās の万户」の駐屯地 Shahkuh, Baghdad と Hindu Birkiji の駐屯地 Badghis 地方を Amūya 河畔との位置關係を明確にすることによつて裏ひかれるはずである。Baghdad につては問題がないが、Shahkuh につては明確な比定は出来ない。しかし、だいたいの見当はつけられる。既に述べた通り、軟禁から救出された Arghun が Ahmad Khan 追討のため Khurasān から Adherbaijan と回し Lei に着つた時、「Isfahan の長官」Bura が Shahkuh に駐屯つた「Qarānās の万户」の召喚の為派遣されてゐるところから見て、Shahkuh の位置は Bura がその地理を通じてゐた Isfahan の周囲のあまり遠くない所にあつたと考えられ、また、夏营地でもあり、その名からもうかがわれるように山中の遊牧可能な地と想像される。<sup>(註)</sup>

また、一二二二年、Ahmad Khān の即位後 Argūn は Adherbaijān から Khurāsān に帰る途中の事を記した「Ahmad 紀」の記述<sup>(89)</sup>で、

《Argūn 及び Siakhūh 及び 類を以て Hamadān に使者を派遣し、云々。

とありつゝ Siakhūh 及び Adherbaijān 及び Khurāsān への帰途立寄れる所を Hamadān 地方からその遠くは離れてつゝなかつたと考へられる。

それによつて、これもまた既に述べた事だが、一二九五甲、Baidu Khān と協定を結んだ Ghāzān が Khurāsān 地方で兵を遣ひ Baidu Khān を攻つた Siakhūh の道を通つて帰る事を知らせると、Baidu Khān は彼のフシール達に Ghāzān を Siakhūh と呼ばつた「Qarātūnās の軍隊」と合同するのを恐れて、「往路と同じ道を通つて帰るより」命じた。この事、Ghāzān の往路が「Ghāzān 紀」によつて、Khurāsān 地方から Damghān → Semnān → Frūzkuh → Teherān → Qazvin → Qunqūravālan → Sefīdrūd などの Khurāsān 地方から Adherbaijān へ田の畝を普通種のスーナをまいたことが判り、<sup>(89)</sup> Siakhūh 及び Adherbaijān から Khurāsān への帰途立寄れる所に位置し、上述の Ghāzān の往路のルートからは外れた所にあつたと考へられ、その比定が大体正しいものと考えられる。つまり Siakhūh 及び Khurāsān の Bāghis 地方を Amūya 河畔からは大分離れてつたと考へられるわけである。

また一方、一二二四年、Argūn は Hindū Brikijī を Nūrūz の「Qarātūnās の万户」を召喚した時、既に述べた通り、Argūn は Abhar から東へ進み、Lei を經つて Damghān に到着したが、Damghān に到着時には「Qarātūnās の軍隊」は既に引き返した後であつた。「Damghān から引き返した」とあつて、西方から移動して来た Argūn

の軍隊と出会わない方向と云え、Khurāsān 地方しか考えられな。つまり、Arghūn に協力せずに引き返した「Qarānās の軍隊」といふのは Khurāsān 地方駐屯の Qarānās の軍隊であり、それはその考察から明らかであらう。Hindu Bītkijī の「Qarānās の万戸」といふは、ムルツ、Hindu Bītkijī を Nurūz の支配する「Khurāsān 地方駐屯の Qarānās の万戸」と、Siākhāh, Baghdad 駐屯の「Khān 直屬の Qarānās の万戸」とは別のものであると断定できるのである。

## 第二章

### 第一節

前章での考察から、「Khān 直屬の Qarānās の万戸」とは別で、Hindu Bītkijī 及び Nurūz がそれぞれ支配する「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」が、少くとも Ahmad Khān (在位一二八二—八四年)の時代には存在した事が判明した。Hindu Bītkijī は、既に述べた様に、一二五八年の Baghdad 攻撃時にすでに有力アミールとして Halaḡū の身边にあつた人物であり、Amūya 河畔に駐屯していたことが知られている一二八二年よりかなり以前から万戸長の地位についていたのではないかと想像される。また、Nurūz の父で Halaḡū の遠征時の「Khurāsān 総督」Arghūn Aqā は、回曆六七三(一二七四—七五)年、Tus で歿するまで Khurāsān 地方にあり、一二八四年、Nurūz が支配していた「Qarānās の万戸」は、以前、父 Arghūn Aqā の支配下にあつたものではないかも想像される。しかしながら、「Qarānās の万戸」といふ語は、前章で挙げた「Ahmad 紀」の記事の他には先



行の諸「本紀」中に全く見当らず、そのため、「Khurāsān 地方の Qarānūs の万戸」の起源や、「Khan 直屬の Qarānūs の万戸」との関係等を、「本紀」の記事から直接知ることは出来ない。これらの問題について唯一の手掛りとなるのは、Ghazān Khan 時代の「Khan 直屬の Qarānūs の万戸」の万戸長となつた Aladu に関する「Ghazān 紀」の断片的な記事<sup>61)</sup>、それでは、Arghūn Khan 時代の一二八九年、Nuruz が Khurāsān 地方の守備にあたつていた諸王 Ghazān に対して叛乱を起した直後の事を次の様に記している。<sup>(61)</sup>

Ghazān が Nuruz と戦つた二日前、アミール Aladu と多くの Qarānūs のアミール達が Nuruz の家々を攻撃して総てを荒掠した。(中略)△Qarānūs のアミール達は▽彼等の習慣通り、荒掠の後、二・三のグループに分れてアミール Aladu のもとから離れ、ある者達は Nuruz と結び、ある者達は自分達の家々に行き、叛乱や騒動を起した。Aladu は彼等がばらばらに散つたのを見ると自分の家を Badghis 地方の Dara-i Makhkam に移し、自ら Ghazān のもとで合同して来た。Ghazān は Aladu の正義の行動に対して大いに恩賞を施した。

既に述べた通り、Aladu が「Khan 直屬の Qarānūs の万戸」の万戸長となつたのは、一二九五年 Ghazān Khan が即位した後の事であり、右の「Ghazān 紀」に、一二八九年、Aladu が率いたと記されている Qarānūs の軍隊は、「Khan 直屬の Qarānūs の万戸」とは別のものである事は言うまでもない。つまり上掲の記事によれば、Aladu が Ghazān Khan の即位後「Khan 直屬の Qarānūs の万戸」の万戸長となる以前、すでに、彼と Khurāsān 地方の Qarānūs の軍隊との間で結びつきがあつた事になる。そしてまた、この時の Aladu の住地

Badghis 地方は、既に述べた通り Hindu Brikī の支配した「Khurāsān 地方の Qarātūnās の万戸」と関係が深い地名である。

『集史』中の「Khurāsān 地方に駐屯したマミールに関する記事」(一二八九年の Nūrtūz の叛乱時以前のものは極めて少いが、唯一カ所だけ、この Alādū と関する記事が「Abāqā 紀」に見うけられる。それは、回曆六七一年(一二七二—七三)年、Abāqā Khān は Chaghataī Khān 国軍の Bukhārā 攻撃を知られ、これに対処した時の事に関する次の記事である。<sup>(82)</sup>

六七一年、(中略) Abāqā Khān は Tūpsin Ughūl<sup>(83)</sup> の後をうけて Khurāsān の支配者となつてゐた Isūdar Ughūl<sup>(84)</sup> を Bukhārā と向うほう指名し、「もし Bukhārā の住民が故郷を離れて Khurāsān に移る事に満足ならば彼等を攻撃するな。さもなければ Bukhārā を掠奪せよ」と命じた。そして Nīkpaī Bahādūr, Jārdū, Alādū に二万の軍隊を授けて Isūdar とついでに出發させた。

この記事により、一二七二年頃 Khurāsān 地方でゐた Alādū が Abāqā Khān の命令で Bukhārā へ派遣された事を知る事が出来るが、それでは Alādū と同行した Nīkpaī Bahādūr, Jārdū はどのような者達で、また、彼等三名が率いて出發した二万の軍隊とはどのようなものであろうか。

まず、Nīkpaī Bahādūr とついで「Qanqrāt 部族考」に次の様な記事がある。<sup>(85)</sup>

Jmīkītz Khān の時代、他にも Qanqrāt 部族の マミールがいた。その名を Tūqūchar と云つた。◀(中略) のの團 [Iran, Ī Khān 國] ▶と云ふマミールで、Badghis 地方に駐屯する Qarātūnās の千戸長 (amīr-i

hazāre-i Qarānās) Nikpai Bahādur が彼の孫である。

このように、Alādū と同行した Nikpai Bahādur が「Qarānās の千戸長」で、「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」の万戸長 Hindu Britiji と同様 Bādghis 地方に駐屯したことが判明する。

また、Alādū と Nikpai Bahādur とは同行した Jardu と関連する記事が「Ghāzān 紀」にある。それによ、「一二八九年、諸王 Ghāzān に対し Khurāsān 地方は叛乱を起した Nūrūz が、一二九四年、己の配下の Satalmish を Ghāzān のもとに派遣し、帰順を申し入れた直後の事を記して次の様にいう。<sup>(98)</sup>

Nūrūz の兄弟の Hājī と Chardū Bahādur の息子 Anjil が Nūrūz のもとから来て、Satalmish が彼々と同じ言葉《を伝えた。》Ghāzān は彼等をなめ、そこで Sarkhas 地方へ向いた。

この記事により我々は、Chardū (Jardū) Bahādur の息子 Anjil が、「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」の支配者 Nūrūz のもとでいたことを知るべきである。

要するに、これらから、一二七二年頃、Abāqa Khān の命令で一万の軍隊と共に Bukhārā に派遣された Khurāsān 地方の三人のマニーン達のうち、Nikpai Bahādur が「Qarānās の千戸長」で、「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」の万戸長 Hindu Britiji と同様 Bādghis 地方に駐屯したと、Alādū が一二八九年、やはり Bādghis 地方で Qarānās の軍隊と行動を共にしていた事実があったこと、Jardu の息子 Anjil が一二九四年、「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」の支配者 Nūrūz に従っていたこと、つまり、いずれも Khurāsān 地方で Qarānās の軍隊と関係があった事が判つたわけである。

これらの事実から考へて、一二七二年頃、Nikpai Bahādur, Aladu, Jardu の三名が指揮して Bukharā と向つた一万の軍隊が Qarānās の軍隊であつた事は確かであろう。そしてさうして Aladu や Jardu と Nikpai Bahādur 同様、「Qarānās の千戸長」程度のアミールであつたと考えられ、彼等三名とも、Hinda Butki 支配下の「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」か、Nūrtuz [あるいはその父 Arghūn Aqa] 支配下の「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」の中に入つていた事も間違いないであろう。云々換えれば、一二七二年頃にはすでに「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」は存在していたと云えるわけである。

## 第二節

前節の考察で、Hinda Butki を Nūrtuz の支配した「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」が、少くとも Abaqa Khān 時代の一二七二年頃には存在した事が判明したのであるが、「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」に関する記事は、一二八四年の Arghūn と Ahmad Khān との Khān 位継承争つたつて記した前述の「Ahmad 紀」の記事中に見られるのを最後に、それ以後の諸「本紀」には全く見うけられない。しかし、「Ghazan 紀」の前半、一二八九年 Nūrtuz の叛乱時から一二九五年 Ghazan の即位時に至る Khurāsān 地方の状況を詳細に記した部分には、Khurāsān 地方で叛乱、掠奪を行う Qarānās の諸集団に関する断片的な記事が屢々見うけられる。

前節で、「Aladu が Nūrtuz の叛乱直後、Qarānās のアミール達を率いて Nūrtuz の家々を攻撃し、その後 Qarānās のアミール達は小集団に分れてそれぞれ独自の行動をとつた」という記事を挙げたが、その事件の直

後、Arghūn Khan のもとから Ghazan のもとに援軍が到着した頃の記事の中に次の様に見える。<sup>(67)</sup>

Narūz は 'Iraq 方面から Ghazan 救援の軍隊が到着し、己のもとに向おうとしているのを知ると、家々と従者達を Herat 方面に送り、自身は Jarnagan まで進んだ。そして対抗できないのを見てとると引き返した。優勢な Ghazan 軍は Narūz を追いつ Jam 地方まで進んだ。そして Jam の上にある Khar Sarai で Ujairū が、多くの Qarātūna や Narūz の従者達の一人であつた Yakūbidān の息子 Tamajī と共に Ghazan のもとに帰順して来た。

それより、右の記事を繰り、Narūz の退口後、Ghazan が Narūz と結んでゐた諸王 Kinshū を召喚した時の記事に似たの様だ。<sup>(68)</sup>

《Ghazan は Kinshū と彼の大オトルを召喚する為、アミール達を Badghis に送じた。Kinshū は了解し、己の夫人達、従者達と共に Ghur や Ghurjistan の山中を通り、大オトルのアミール達や彼と共にいた Qarātūna の軍隊の総つゆをたじ、Ghazan のもとに参じた。

これらに Khurāsān 地方に Ghazan に対抗した Narūz や諸王 Kinshū のもとから Ghazan のもとに降参した Qarātūnas に関する記事であるが、それより、一二九〇年、Arghūn Khan のもとから来てゐた援軍が一部を残して帰還した頃の事として次の様に述べられてゐる。<sup>(69)</sup>

その夏、多くの Qarātūna 達が叛乱を起つて Juvān 地方に進んだ。彼等の長は Danishmand Bahādur で、荒涼を行つた。《これに対して Ghazan は、アミール Mulaī を彼等を撃退する為に指召した。

II Khan 国史に見られる Qarātūnas という

注

ここに記されている Qarānās の軍隊の長 Danishmand Bahadur は「Ghazzān 紀」の他の部分に一カ所だけ見えてゐる。すなわち、一時 Ghazzān のもとに降つた Nūrz が、一二九七年、Ghazzān Khan の断固たる統一政策の爲討たれて Herat 方面に逃れた頃の事を述べた次の記事に、

Nūrz の十戸長は Danishmand とつう名の者が Ghazzān 軍のもとに帰順して来た。マミン Qutluqshah は彼を Nūrz 追討の先鋒隊として出發させた。Nūrz の弟 Uratāi Ghazzān は Nishāpūr に出から、Nūrz と Ghazzān Khan の軍隊の到着を伝えた。Nūrz は那地の地を振り、Marhala-i-yam は Danishmand Bahadur の軍隊と遭遇し戦つた。Danishmand Bahadur の軍隊は寡勢であつたが Nūrz は敗れ、少数の者と共に逃れた。と、  
 といふのがそれである。

これにより、Ghazzān Khan 即位後の一二九七年、Danishmand Bahadur が Nūrz の配下にあつた事が判明する。おそらく彼はそれ以前から Nūrz に従つてゐたと考えられ、一二九〇年、彼が率いてゐた Qarānās の軍隊も Nūrz 支配下の Qarānās の軍隊であつたことはまず間違ひなうであらう。

ついで、引き続き Nūrz の叛乱時以後の Khurāsān 地方の Qarānās について見よう。その記事と同じ一二九〇年頃の記事の中に次の様にも記されてゐる。<sup>(2)</sup>

その冬、Qarānās の多くが Sarkhas 地方で叛乱を起し Merv 地方に移つた。Ghazzān の軍隊 (rāyāt-i humāyūn) は Dara-i Margha 地方で移動し、Alādū Nūyān を、彼等を討つて帰順せざるを派遣した。

ここに記されている Qarānās の軍隊がいかなるアミールに率いられていたかは不明であるが、ともかく、今まで本節で挙げたものとは別の Qarānās の集団があつて Ghāzān に反抗していたことがうかがわれる。

以上のように、一二八九年、Nūrūz が Khurāsān 地方で叛乱を起して以後、Qarānās 達のある者は Nūrūz に従ひ、ある者は Nūrūz と結んでゐた諸王 Kinsū に従つてゐた。そして彼等のうち Ghāzān のもとに來降した者もあれば、反抗した者もいた。また、これらとは別の Qarānās の集団が Ghāzān に反抗してゐた。Abāqā Khan 時代から Qarānās の軍隊を支配してゐた Alādū のやうに Ghāzān に従つて活躍した者もいた。そして Nūrūz が叛乱を起して以後の Khurāsān 地方には、「Qarānās の万戸」という統一体は見当らず、もつぱら小集団に分れて離合集散してゐた Qarānās 達が見うけられるだけなのである。

これら Qarānās の小集団を支配してゐたアミール達の名は、「Ghāzān 紀」以前の諸「本紀」の中には Alādū 以外には全く見出せないが、いずれももとは Nūrūz や Hindu Bīrīkī の支配してゐた「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」の中にあつたアミール達に違ひない。それでは「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」はいつ頃から解体しはじめたのであらうか。

一二八四年、Arghūn と Ahmad Khān との Khān 位継承争ひ<sup>(27)</sup> Arghūn と Ahmad Khān の軍隊は無きでたてて軟禁せられた直後の事を記した「Ahmad 紀」の断片的な記事の中に次の様に見える。

《Ahmad Khān 紀》Ürīmūr Qūshchī と Nīkpai Qūshchī と彼の臣衆の Qājār Akhtājī とを Arghūn と心  
を寄せたかどい殺した。

うじて「Arghun 側だつた為 Ahmad Khan に殺された。」と記されている Nikipai Qushchi は、そきに述べた「Qarānās の千戸長」Nikipai Bahadur と同一人物に相違ない。万戸長千戸長が罪を得て処刑された場合、その軍隊は解体、分割されるのが普通であり、「Khurasān 地方の Qarānās の万戸」の一部は、一二八四年、Arghun と Ahmad Khan との Khan 位継承争ひの時からすでに解体がはじまつていたと考えられる。また、Nikipai Bahadur とは逆だ、前約に反して Arghun に協力しなかつた為、彼の即位後捕えられた Hindu Birkji の「万戸」も、その後の記事が無いところからみて、やはり、彼が捕えられた時点で解体されたものであらう。

つまり、一二八四年の Arghun と Ahmad Khan との Khan 位継承争ひにからんで「Khurasān 地方の Qarānās の万戸」の解体がはじまつたわけであるが、さうだ、一二八九年には Nurūz も叛乱を起し、その過程で二つの「Khurasān 地方の Qarānās の万戸」は小単位の集団に分裂してしまい、やぎに挙げた「Ghazān 紀」の記事に見られるように、それぞれが独自の行動をとり、叛乱や掠奪を行つていたのである。しかし、その後一二九四年に Nurūz が Ghazān のもとに降ると、これら小単位の集団に分裂してゐた Qarānās 集団の多くも Ghazān のもとに投じたように、この頃の事を記した「Ghazān 紀」の記事には、<sup>(74)</sup>

Qarānā の軍隊のアミール達——即ち Tūghai やその他のアミール達——が Ghazān のもとに合同して来た。

とか、

反抗することが恐しくなり、Sakht-i Mahkam の地で▲来降を▽懇願してゐた多くの Qarānā の軍隊が



Ghazanのもとにやつて来た。そして命令に従い、 $\blacktriangledown$ 指定された遊牧地 $\blacktriangledown$ Sarkhas 地方に出発して行った。<sup>(75)</sup>  
などを見せている。

以上、極めて断片的な史料から「Khurasan 地方の Qarānās の万戸」について考察して来たが、第一節、及び第二節を合せて、結局次の様に整理される。即ち、『Khurasan 地方の Qarānās の万戸』は少くとも一二七二年頃には存在し、『Khan 直属の Qarānās の万戸』と同様その起源は Abāqa Khan 時代に求められるが、『Khan 直属の Qarānās の万戸』とは異り万戸長の地位は史料から見ると限りではほとんど移動しておらず、万戸長の私兵的性格が強かつたように見うけられ、特に Khan の直属軍とは認められなかつた」と。

### 第 三 章

#### 第 一 節

やつて、今までは Siakhkh, Baghdad をそれぞれ夏营地、冬营地とする「Khan 直属の Qarānās の万戸」と、『Khurasan 地方の Qarānās の万戸』の性格を変遷について述べて来たが、『集史』にはこれらの他に、以下に挙げるような Qarānās に関する記事がある。

まず、『Ghazan 紀』に次の様に記されている。<sup>(76)</sup>

六七八（一二七九—八〇）年、Abāqa Khan は Fars 地方を荒掠していた Qarānā の軍隊を撃退する為  
Khurasan 地方に向つて Bulghān Khātun と Ghazan とを手合へて連れて進んだ。そして Arghūn Khān<sup>(77)</sup>が

II Khan 國史料に見られる Qarānās とつて 志茂

出迎えて来り Semnan で合同した。(中略) Abāqā Khān は Kirujām, Herāt に居り Argūn Khān <sup>(8)</sup>を Qarātūna を撃破せる爲 Ghūr, Gharja 方面に出発せられた。

また Argūn と Ahmad Khān の Khān を繼承争つる時 Ahmad Khān 側とてつて処刑せられた Chaghatai 家の誰王 Yasār Ughul <sup>(9)</sup>とてつて語つた「Chaghatai 紀」の記事では次の様に見える。<sup>(8)</sup>

《Isutūta の》第三十三 Yasār は Abāqā Khān が Qarātūnas を撃破せる爲 Herāt に出かけた年だ当押 [Iran, 卅 Khan 國] と稱順した。

やむを得ず「Abāqā 紀」では次の様で記されてつる。<sup>(8)</sup>

その年 [回曆六七八年] の Rabi' al-Ayval 月十四日 Abāqā Khān は Herāt の垣く行つた。そして《その》月の末日 Qarātūna のフミール達が帰順して来た。

これらの三つの断片的な記事は Abāqā Khān が回曆六七八(一二七九—八〇)年 Fars 地方を侵襲せる Qarātūnas を討伐せる爲出陣し、当押 Khurāsān 地方に居つた息子 Argūn を派遣して討たせ、その結果 Qarātūnas のフミール達が Herāt の Abāqā Khān の手とて来降した事を示してつる。

この時來降した Qarātūnas 達を中心に構成されたのが、第一章、第二章で考察した「Qarātūnas の万戸」であるなら問題はかなり簡単になる。しかしながら、既に述べたところから明らかかなようだ、「Khān 直屬の Qarātūnas の万戸」は一二六五年の Abāqā Khān の即位直後には存在し、また、「Khurāsān 地方の Qarātūnas の万戸」も少くとも一二七二年頃には存在してつた。すなわち、それぞれの「Qarātūnas の万戸」が Argūn

に Qarānūs を討たせた回曆六七八(一二七九—一八〇)年より以前にその存在が認められるのである。そうだとすれば、Abāqa Khan のもとに來降した「Fars 地方を侵寇する Qarānūs」は、「Khan 直屬の Qarānūs の万戸」や、「Khurāsān 地方の Qarānūs の万戸」と何らかの關係があつたとは想像されるが、これらとは直接には結びつかないのである。

## 第二節

『集史』中、「Fars 地方を侵寇する Qarānūs」については、前節で挙げたもの以外には全く記事が無いが、Marco Polo は II Khan 国東方边境の盜賊 Carānūs に関する興味深い記事を伝えている。

ちよじ、Marco Polo は一二七〇年代のはじめ、元朝への往路 Kirman から Hurmūtz に向つた時の事として次の様で記している。<sup>(88)</sup>

この平野には Carānūs と呼ばれている敵から守る為、高く厚い城壁をめぐらしたいくつかの都会や村や町がある。Carānūs というのはこの地方に多数いる非常に残忍で邪悪な種族で、当地を蹂躪してはひどい害を与えていた盜賊であつた。それでは何故 Carānūs と呼ばれるのか。(中略)。それは彼等の母がインディ人 (Indie) で、父がモンゴル人 (Tartar) であつたからである。

この連中がある地を蹂躪し、掠奪しようとする場合には妖術を使つて白昼でもまるで闇夜のように暗くしてしまふ。その為誰もが何も見えなくなつてしまひ、傍にいる仲間までもほとんど見えない。しかも、この暗を

をこの平野の七日行程の距離まで及ぼす事が出来る。(中略)。それに彼等はこの地方の事を良く知っており、真つ暗闇にすると、お互にびつたり寄り合つて馬にまたがり無言でこの平野を通り抜けて行く。ある時は一万騎もあり、ある場合にはそれ以上のこともあり、それ以下のこともある。そして、彼等は掠奪しようとする平野全体に展開するように多くのグループに分れて騎行して行く。そのようなわけで、町や城からはずれているこの平野の中で見つけられたものは、男でも女でも野獣でも物でも一切逃げ出すことは出来ない。そして彼等が男を捕えると老人は容赦なく殺してしまい、若者や女だと他の地に農奴や奴隸として売り飛ばす為連れ去つてしまう。(中略)。

彼等には王がいてその名を Negodar と云い。非常に精悍な男であつた。この Negodar はかつて部下の一万を率いて大カーン<sup>(85)</sup>の兄弟で、ある高貴な地方の領主である Ciagatai の宮廷に行き、Ciagatai と共に暮したことがあつた。と云うのは、Ciagatai は彼のおじでもあり、非常に偉大な君主であつたからである。Negodar が Ciagatai と共に暮していた時、彼が大変な悪行を働いたのだが、その事の次第をお話しよう。

彼は Ciagatai の最精鋭部隊の武装兵一万をそそのかすと、当時大アルメニアにいた Ciagatai のもとを離れ、非常に残忍な無頼の徒である自らの騎兵一万と共に逃亡した。そしてこの二万の勇猛な兵達と共に、バダクシャン<sup>(86)</sup>地方を通過し、Pasciai 地方を過ぎ、更にカシミール<sup>(86)</sup>地方を通つたが、彼等はここで多数の部下や馬匹を失つた。と云うのは、この道が非常に狭く荒れていたからである。Negodar 一行はこれらの諸国をくまなく通過すると Dilizar と呼ばれている地方の辺境からインドに入つて行つた。(中略)そして彼等は同じく

Dilivar という名の都会を占領するとそこに留り、(中略)、当地にあつて非常に偉大で富裕であつた Asidin Soldan という名の王からその領土を奪つた。と云うのは、Negodar が Asidin Soldan が気付かない時に不意討ちをしたからである。

こうしてこの地に Negodar は△麾下の二万の▽他の者達をも支配することになつた。そして白色人種であつたモンゴル人達は、黒色人種であつたインドの婦人達と交つて Carannas と呼ばれる子供達を産んだ。Carannas というのは彼等の言葉で「混血児」を意味した。これが Reobar の平野やその他の諸地方をあらゆるの方法で蹂躪する Carannas 達である。(中略)。

彼等は時によつて三十日も四十日も馬に乗つて出かけるが、たいていは Reobar 地方に出かける。と云うのはホルムズ<sup>(87)</sup>に取引きに出かける総ての商人達はインドから来る商人を待つ間、長い旅でやせてしまつた驃馬や駱駝を豊かな牧草地で肥やす為、冬中 Reobar の平野で過すからである。Carannas はこれを待ち構えていてあらゆる物を掠奪し、人々を連れ去り売つてしまふ。

Marco Polo のこの記事の中には、盗賊 Carannas 集団の前身や Carannas の語義などについてペルシヤ語史料には見られない非常に興味深い記述が見られ、これらが Carannas の性格の究明に際して貴重な史料であることは云うまでもない。しかしながら、この中にはいくつかの事実の混同や、単なる伝聞にすぎないと思われる部分もあり、この記事を全面的に受け入れることは出来ず、これらについては検討を要する。

まず、Marco Polo の叙述を整理すれば以下の様になる。

II Khan 国史料に見られる Carannas について

未定

(1) Carannas は Kirman 地方を中心に活動した盜賊である。  
(2) Carannas というのは、モンゴル人とインダの女との間に生れた「混血児」を意味する言葉である。  
(3) 盜賊 Carannas 集団の首領の名は Negodar と云い、かつて一万の軍隊を率いておじの Ciagatai の宮廷にいたが、自分の兵一万と Ciagatai の兵一万を率いて逃亡し、カシミール地方を通つてインドに入り、そこを根拠地とした。

(1) の「Carannas は Ti Khan 国東方辺境に活動した盜賊である。」とする点は、さきに挙げた『集史』の、「Abāqa Khan が Fars 地方に侵犯して掠奪を行う Carannas を皇子 Arghun に討たせた」という記事と一致する。時代も、『集史』の記事は一二七九—八〇年頃、Marco Polo の叙述は一二七〇年代のはじめのもので、共に Abāqa Khan の時代であり、ほぼ同時期と云える。(2) は Marco Polo 独自の記事であり、その正否は今後の考察によらねばならない。(3) のうち、「Carannas 集団が二万の軍勢でカシミール地方を通つてインドに入り、そこを根拠地とした」という部分も(2)と関連づけて考察されるべきものと思われる。

問題なのは(3)のうち、「盜賊 Carannas 集団の首領の名を Negodar と云い、彼は一万の軍隊を率いておじ Ciagatai の宮廷にいたが、自分の兵一万と Ciagatai の兵一万を率いて逃亡した。」という部分である。Carannas の首領の名を Negodar とするのは明らかに誤りで、Negodar に比定される人物は別にいるが、Marco Polo が盜賊 Carannas 集団と Negodar とを誤つて結びつけてしまったのにはそれなりの理由があつた。次にこの問題について整理してみよう。

第三節

Marco Polo の話の Negodar 是、Hülagü の遠征の際して Chaghatāi 家から派遣された Chaghatāi の孫 Nikudar Ughul<sup>(88)</sup> と比定される。Nikudar は Il Khān 國成立後も Irān に留り、万户を率つて Abāqā Khān に従つてしたが、一二六九年、Chaghatāi 家の Barāq が Khurāsān 侵入を計画した時、Derbend を經由して Barāq 軍と呼应しようとして、捕えられて軍隊は解体され、許された彼も間もなく歿した。<sup>(89)</sup>しかし、その残党を Chaghatāi 系の諸王達が Il Khān 國東方辺境に自立して侵寇を繰り返し、『集史』には Nikudaryān [Nikudar 一門] の名で記されている。

Il の Nikudaryān と同じくは「Abāqā 紀」中、「Nikudaryān の軍隊の Fars を Kirmān への侵入と掠奪」といふ条に、<sup>(88)</sup>

六七七（一二七八—七九）年、虎の年、Nikudaryān の約一万余が Fars 地方に侵寇した。

とあり、彼等が Abāqā Khān 時代、Fars, Kirmān 地方に騎馬を侵寇する掠奪者の集団であつたことを示している。

また、同じく「Abāqā 紀」に、<sup>(89)</sup>

六七七（一二七八—七九）年（中略）、Abāqā Khān は Tabriz から Khurāsān へ向つた。そして六七八（一二七九—一八〇）年、Rabī' al-Ayval 月三日、諸王 Arghūn を軍隊と共に Nikudaryān 襲取の爲に出発させた。Arghūn は Sistān まで出かけた包圍し、帰還した。そして Chaghatāi の御孫 Mubārakshāh の長子

Il Khān 國史本に見られる Qarūnās と同じく 十次

Djajbuqa<sup>(88)</sup> やその他彼の一族 (ürugh) に属するものを《掃順させ》自軍と共に《Abaga Khan のもとに》おたらしめた。

とあつて、回曆六七九(一二七九—八〇)年 Abaga Khan が東方に出軍して息子 Arghun に討たせたのは、第一節で述べた Qarūnās だけではなく、Nikudaryān も含まれていたことが判る。つまり、Qarūnās と Nikudaryān も全く同時期に Kirman, Fars, Sistan など Il Khan 国東方辺境に侵襲して掠奪を行つた集団なのである。とすると、この両者は同一のものではなかつたかという疑問も生ずる。<sup>(89)</sup>しかし、時代はちやちや降るが、Ghazan Khan 即位後の一二九九年頃のことを記した「Ghazan 紀」の記事で、<sup>(90)</sup>

‘Taram 地方に住居のあつた Qarūnās——その長の名を Būqa とつた——の中から《Qarūnās の》千戸が迷ひつゝ、‘Trāq の道をとつて Yazd や Kirman 地方を過ぎ、道々掠奪を行つて Binigan と Nikudaryān と合同した。

とあつて、<sup>(88)</sup>両者は明らかに別の集団であることが判る。<sup>(89)</sup>

ついで、この Marco Polo の記事に反ひ、Marco Polo が、Il Khan 国東方辺境を掠奪する Qarūnās と Nikudaryān とを混同したのは、今考察したように、両者が全く同時期に同地方に活動したことによると思われるが、とにかく両者は全く別の集団であり、第二節で整理した Carannas に関する記事のうち、③の中の、「盜賊 Carannas 集団の首領の名を Negodar とす、かつて一万の兵を率つておごの Ciagatai の宮廷にいた。」という部分に、Hulagu の遠征に際して Chaghatai 家から万戸と共に派遣された Nikudar のことをちやちや誤つて伝えたもの



のであり、Qarānāsの考察にあたつてはこれを除外すべきである。また、「Negodarが自分の兵一万と、Ciagataiの兵一万を率いて Ciagataiの宮廷から逃亡した。」という部分は、Chaghatai家の Nikudarの行動としてはそのまま受け入れることは出来ないが、「盗賊 Caranus 集団のものとの勢力が二万であつた。」という点では今後の考察の対象として残ることになる。

結局、II Khan 国東方辺境に侵寇する盗賊 Qarānās については、Marco Polo の記事(1)・(2)・(3)及び『集史』の断片的な記事を合せて次の様に云える。即ち、「Qarānās 集団は二万の兵力でカシミールを通つてインドに入り、そこを根拠地として Abaga Khan の時代 II Khan 国東方辺境に活動した盗賊であり、“Qarānās”とは、『モンゴル人とインドの女との混血児』を意味する言葉である。」と。

## 第四 章

### 第一 節

さて、これまで三つの章において、『集史』の記事を中心に、多岐にわたつて記されている Qarānās に関する記事を大きく以下の三つに分けて整理した。

(1) Siakhkūh を夏營地、Baghdad を冬營地とする「Khan 直屬の Qarānās の万戸」は Khan の采邑に入つていたもので、その支配権を委任された Khan 側近のアミールが万戸長としてその任にあたり、原則としてその地位は世襲のみならず、Abaga Khan 即位時の Qarūbūqā から Sūntāi, Halqūū, Tūghāchār を経つて Ghāzān Khan

時代の Aladu に及んだ(『集史』)。

(2) 「Khan 直屬の Qarānās の万戸」とは別に、Hindu Britki 及び Nuruz がそれぞれ支配する二つの「Khurasān 地方の Qarānās の万戸」があり、少くとも Abaqa Khan 時代の一二七二年頃にはすでに存在していたが、Hindu Britki は一二八四年、諸王 Arghūn と Ahmad Khan とが Khan 位継承争いを行った時、前約に反して Arghūn の協力要請に応じなかつた為、Arghūn の即位後捕えられ、その「万戸」は解体された。また、Nuruz も Arghūn Khan 時代末期の一二八九年、Khurasān 地方の守備にあたつていた諸王 Ghazan に対して叛乱を起し、その過程で彼の「万戸」も分裂し、かつて解体された Hindu Britki の「万戸」の残党共々 Qarānās の軍隊はそれぞれ小集団に分立して離合集散しはじめ、中には Abaqa Khan 時代から Qarānās の軍隊を支配していた Aladu のように Ghazan に従つて活躍した者もいたが、大部分は Ghazan に対して反抗を繰り返した。しかし、一二九四年、Nuruz が Ghazan のもとに降服するに及んで多くの Qarānās の小集団も Ghazan のもとに降つた(『集史』)。

(3) 「盜賊、Qarānās 集団」は二万の兵力でカシシルを通つてインドに入り、そこを根拠地として Abaqa Khan の時代、Il Khan 国東方辺境に活動したが、「Qarānās」とは、「モンゴル人とインドの女との間に生れた混血児」を意味する言葉であつた(『Marco Polo 旅行紀』。傍点部分は『集史』と共通)。

これらをもとに、まず Qarānās の本体が何であるかを明らかにしていきたいと思う。しかしながら、(1)・(2)・(3)を比較しただけでは、直ちに Qarānās の本体を理解することは出来な。これら(1)・(2)・(3)の Qarānās に

一見して共通する部分は少なく、共通している点と云えば、いずれも一番古い年代が Abaqa Khan の時代である事と、Ghazan Khan 時代、Khan 直属の Qarānās の万戸」の第五代万戸長となつた Aladū が、それ以前の Abaqa Khan, Arghūn Khan 時代から Khurāsān 地方で同地の Qarānās の軍隊と関係があつた事だけが挙げられるべきであらう。

(1)及び(2)の Qarānās の軍隊に關係したアミールは、史料から知り得る限りでは Aladū ただ一人だけであり、<sup>(87)</sup>まづ、この Aladū に注目した。 (3)との関連を考察する上で、彼の祖先の行動が問題となるわけであるが、これについては「Tatar 部族考」<sup>(88)</sup>、

Sali Nūyān の後、彼の息子 Aladū がその軍隊を支配した。

ともいふ、Aladū の父が Sali Nūyān である事、Aladū が父の支配した軍隊を受け継いだ事を知る事が出来る。それでは Aladū の父 Sali Nūyān が支配した軍隊となつかなるものであらうか。

これについては、同じく「Tatar 部族考」<sup>(88)</sup>に

《かして》二万の軍隊を Hindustān の辺境に派遣し、Qundūz や Baqlān や Badakhshān 地方に駐屯せしめた。彼等《二万の軍隊》の万戸長《の地位》は Mankūā とつう名の者に与えていた。彼が歿すると《その地位を》Hūqūtūr とつう名の者に与えた。彼もまた歿すると《Mankūā Qān は》この Sali Nūyān を Hūqūtūr の代りたその二万の軍隊の万戸長とする為派遣した。《丁度》Hūlāgū Khān を Iran の地《への遠征軍の長》に指名した時だつたのは、Mankūā Qān は Sali Nūyān に次の様によつた。「お前が出かける地

Il Khan 國史料に見るその Qarānās とつう

史料

第十五回 卷 四三

方は Hindustan を Khurasan の境界に、Hulagu Khan が遠征する地方と隣接している。お前<sup>①</sup>の軍隊<sup>②</sup>は Hulagu<sup>③</sup>の遠征<sup>④</sup>軍の一支部となるのだ。すなわち、お前の軍隊を Hulagu に授け、お前は Hulagu の命令下に入るのだとなるのだ」と。その後、Sali Nuyān は、「どうもその地に留つてゐるのかと尋ねた。これに對して Mankū Qān は、「當時駐屯するところなるをさう」と述べた。Sali Nuyān は軍隊を Hindustān, Kashmir に進め、多くの國々を征服し、掠奪して Hulagu の支配下にせよとしたりし、多くの Hindu 人を捕虜として送り返した。

とあり、これから、Aladu の父 Sali Nuyān は Mankū Qān の時代に、以前から Hindustān, Kashmir 地方に駐屯してゐた二万の軍隊の万戸長に指名されてモンゴリアから派遣され、彼の赴任とほとんど同時期に行なわれた Hulagu の Iran 遠征の際には、Hulagu の指揮下に入つて彼の征服活動の側面援護にあたつた事が知れる。したがつて、「Sali Nuyān の息子 Aladu が父の後支配した軍隊」といふのは、Hulagu の遠征時で Sali Nuyān が支配した「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」といふことになるわけであるが、「Hulagu 紀」には Sali Nuyān の支配した軍隊といふ<sup>(10)</sup>

Sali Nuyān と共にあつた軍隊は、現在 Iran 各地におつて餘つたが、継承権により Islam の王 Ghazan Khan の采邑の中に入つてゐる。

と記されてゐる。「Sali Nuyān と共にあつた軍隊」とは「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」であり、それはとりもなほせず「Sali Nuyān の息子 Aladu が父の後支配した軍隊」である。そしてまた、第一章での考察

から明らかなように、「Alādu が支配した軍隊」は、「万戸」は、「Ghazān Khān の采邑の中に入つてゐた軍隊」といふは、Alādu が Ghazān Khān の時代に Tughāchar の後を継ぐと支配した「Khān 直屬の Qarānās の万戸」以外には考えられなう。こゝから、「Khān 直屬の Qarānās の万戸」の前身は、Alādu の父 Salī Nūyān と他の万戸長達が支配した「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の中に求められるのである。

さて、それでは「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」はどうであらうか。既に第二章を述べたように「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」は、万戸長の Hindu Būtkijī や Nūrtuz が Hulāgu 家に対つて反抗し、その過程で細分化してゐたが、一二九四年、Nūrtuz が Ghazān のもとに降服した後、多くの Qarānās の小集団が Ghazān のもとに降し、遊放地を指定された事が知られてゐる。一方、ちぎに挙げた「Hulāgu 紀」の記事では、

Salī Nūyān と共であつた軍隊は、現在  $\triangleleft$ Iran $\triangleright$ 各地におつて總てが継承権により、Islam の王 Ghazān Khān の采邑の中に入つてゐる。

と記されているが、「Iran $\triangleright$ 各地におつて總てが」という部分を考慮に入れてこの記事を解釈すれば、「Ghazān Khān の采邑に入つてゐるかつての Salī Nūyān 支配下の軍隊」というのは、「Khān 直屬の Qarānās の万戸」だけでなく、Nūrtuz の降服後 Ghazān のもとに降し、遊放地を指定された Khurāsān 地方の Qarānās の諸集団や、彼等のうち、その後 Turān 地方に移された者達など、多くの Qarānās の集団をも含んでゐるものと考えられる。云い換えれば、Khurāsān 地方の Qarānās の軍隊「はじめ「万戸」、後に細分化」の前身もやはり Salī Nūyān の支配してゐた「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」であつたと考えられるわけである。そ

つて、『Salī Nūyān の十 Alādū が父の軍隊を支配した』という「Tatar 部族考」の記事は、以下の様に理解されるべきである。即ち「Hūlāgū の遠征時、Salī Nūyān が支配してつた『Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊』は、何かの契機で『Khan 直屬の Qarānūs の万戸』と、『Khurāsān 地方の Qarānūs の万戸』とに分けられ、Salī Nūyān の息子 Alādū は『Khurāsān 地方の Qarānūs の万戸』の中にあつたその一部〔おそらく『Qarānūs の千戸』を支配してつたが、その後 Nuruz の叛乱時以來 Khurāsān 地方で諸王 Ghazān を助けてその即位に貢獻し、Ghazān Khan の即位後、二つに分かれていた父の軍隊を一つに合せて回復した』と。<sup>(85)</sup>

ちひ、それでは Salī Nūyān が Hūlāgū の遠征時に支配してつた「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」とはどのようなものか。ちひの「Tatar 部族考」によると、Salī Nūyān が Mankkū Qān 時代、Hūlāgū の Iran 遠征の直前、モンゴリアから派遣されて万戸長の地位を受け継ぐ以前に、Mankdū, Hūqtūr という二名の万戸長がいたことが知られるが、年代など詳しい事は不明であつた。この問題については、『Hūlāgū 紀』や『元朝秘史』<sup>(86)</sup>の記事を参照するとかなりはつきりしてくる。

ちひ、「Hūlāgū 紀」中、Hūlāgū 遠征軍の構成を述べた記事の中に、<sup>(87)</sup>

《Mankkū Qān》<sup>(88)</sup>は王族 (aqā va im) と相談して次の事を決めた。《即ち》、これ [Hūlāgū の Iran 遠征] に先立つて Baiju や Jirmāghūn と共に Iran に駐屯して鎮撫<sup>(89)</sup>にあたる為に派遣してつた軍隊と、やはり鎮撫の爲、Tair Bahādūr と共に Kashmir, Hind に派遣してつた軍隊を終つて Hūlāgū の指揮下に入れることと決めた。Dair Nūyān<sup>(90)</sup>の所持してつた軍隊は、彼の死後《》が支配し、彼の後《》が支配し、そ

の後、Munkku Qaān は Tatar 部族の Saih Nūyān に与えた。Saih Nūyān は Kashmir 地方を奪取し、数千の捕虜を Halagu のもとに送らした。

とあり、Saih Nūyān が Halagu の遠征時を受け継いだ「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」は、もと Dair Nūyān (Tair Bahādur) が支配して来たものと判る。

また、この「Halagu 紀」と、ちぎの「Tatar 部族考」に記されている万戸長の変遷を比較すると左図のようになり、

「Halagu 紀」      Dair → (      ) → (      ) → Saih

「Tatar 部族考」      Munkku → Hāgūtūr → Saih

結局、「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の万戸長は、

Dair → Munkku → Hāgūtūr → Saih

と受け継がれた事が判明する。<sup>(註)</sup>

それではこの「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の起源はいつ頃のものののであろうか。

これについては『元朝秘史(成吉思汗実録)』に次の様な記事がある。<sup>(註)</sup>

幹歌歹合罕は、一二二九年、己を罕に戴かしめて、内裏に行く萬の番士を、内地の國民を己の物に爲さしめ畢へて、まづ察阿歹兄の處に謀りて、成吉思合罕額赤格の爲掛け置きたる民なる巴黒塔惕の民の合里伯莎勒壇の處に出征したる緯兒馬罕、豁兒赤の後援に、幹豁秃兒、蒙格秃二人を出征せさせたり。

この記事は、一二二九年 Ukai Qaan が即位した直後、Tolai 監国時代の一二二八年に Han に遠征していた兒馬罕 (Jurmaghan) 遠征軍の後援に、幹豁禿兒、蒙格禿という二人のアミールを派遣した事を示している。

ここに記されている「幹豁禿兒」、「蒙格禿」が、Dair の後、「Hindustan, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の戸長になつた「Hugutur」、「Mankda」に比定される事は間違ひなく、初代万户長 Dair が、幹豁禿兒 (Hugutur)、蒙格禿 (Mankda) と同行していたものか、それ以前に先行していたかはこの記事からは不明であるが、ともかく、「Hindustan, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」は少くとも一二二九年の Ukai Qaan の即位直後にはモンゴリアを出発していた事を知ることが出来る。

この Abaga Khan 即位直後の Qutbūqa から Suntai, Hulqutu, Tughachar を経つ Ghazan Khan 時代 Aladu が支配した「Khan 直属の Qarūnas の万户」や、Hindu Brikji, Naruz がそれぞれ支配した「Kharāsan 地方の Qarūnas の万户」の前身が、一二二九年の Ukai Qaan 即位時に起源を持つ「Hindustan, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」で、初代万户長 Dair 以下、Mankda, Hugutur と受け継がれ、その後 Halagu の遠征時には Aladu の父 Sali Nuyan が第四代万户長となつて支配していたものであることが明らかになつたのである。

さて、ここで第三章で整理した Marco Polo の記事を思ひ出していただきたい。Marco Polo は、「Qarūnas 集団は二万の兵力でカシミアルを通つてインドに入り、そこを根拠地として Abaga Khan 時代に Kirman 地方を中心に活動した盜賊で、「Qarūnas」とは『モンゴル人とインドの女との間に生れた混血兒』を意味する言葉である」と述べているが、「Kirman 地方の盜賊」という一項については後に触れるとして、「Qarūnas 集団が二万の



兵力でカシミールを通つてインドに入り、そこを根拠地とした」という点と、「Qarānās」とは、『モンゴル人とインドの女との間に生れた混血児』を意味する言葉である」という点とに注目してみれば、『集史』の記事と、『Marco Polo 旅行記』の記事とが一致している事が解るであらう。即ち、既に考証してきたように、『集史』に記されてゐる「Qarānās の万戸」の前身は、「Khan 直屬」のものも、「Khurāsān 地方」のものも、共に一二二九年、Ukai Qaan の即位直後で Hindustān, Kashmir 方面に派遣されて駐屯した二万の軍隊であつた<sup>(四)</sup>。この軍隊が派遣された一二二九年と、「Qarānās」という語がはじめて『集史』に見うけられる Abaq Khan の時代との間には、彼の即位時の一二六五年をとつてみても三十六年の距りがあり、その間にこの軍隊の兵員であるモンゴル人達と Hindustān, Kashmir 地方の現地の人達との間に混血が生じたという事は十分考えられるからである。つまり、H Khan 国史料に見られる「Qarānās」という語は、「一二二九年の Ukai Qaan 即位時に起源を持つ『Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊』の兵員達と現地の人達との間に生れた混血児達の H Khan 国成立後の呼び名」であることが判明したわけである。

## 第 二 節

さて、第一節での考証により、H Khan 国史料に見られる「Qarānās」の本体が何であるかが判明したが、まだ以下の諸点が問題として残る。即ち、

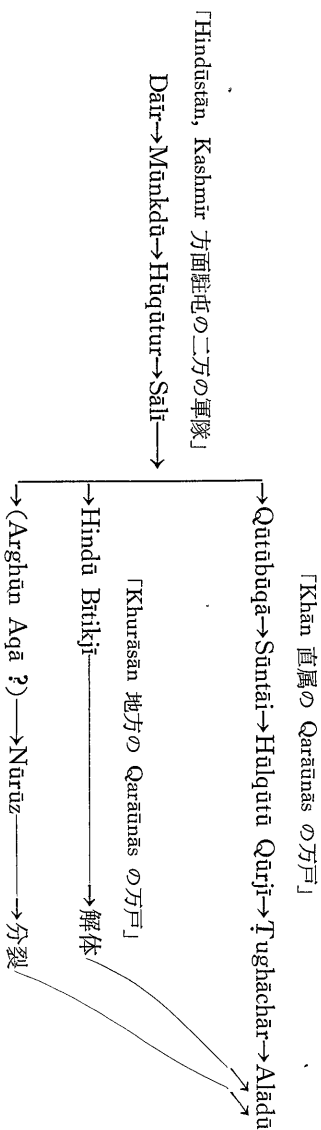
- (1) 「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」のモンゴル人の兵員と現地の人との混血児である Qarānās

達が、いかなる契機で Abaqa Khan 以下の「Khan 直属の Qarānās の万戸」の成員や、「Khurasān 地方の Qarānās の万戸」の成員となつたのか。

(2) Ti Khan 国東方边境に侵襲する「盜賊 Qarānās 集団」はどのような説明されるか。

(3) Ti Khan 国史料に見られる“Qarānās”は、確かに「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」のモンゴル人の兵員と現地の人との混血児と考えられるが、“Qarānās”という語そのものが Marco Polo の言うように、「混血児」を意味するものか否か。

まず、これらのうち Ti Khan 国史研究上最も重要な(1)の問題を明らかにし、あわせて(2)の問題を考察してみた。その上で、「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の万戸長兼と、「Khan 直属の Qarānās の万戸」及び「Khurasān 地方の Qarānās の万戸」の万戸長達の変遷を整理すると左図の様になる。



※<sup>1</sup> 「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の成員である Qarānās 連の一部が、いつ、いつかとして「Abāqā Khān 直屬の Qarānās の万戸」の成員となつたかどうして明かたしてゐない。

これは、Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の第四代万戸長 Sālī Nūyān と「Khān 直屬の Qarānās の万戸」の初代万戸長 Qūtūbqā の時代關係が問題となる。

Sālī Nūyān は、既に述べた通り、Hulāgu の Iran 遠征の直前に「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の万戸長の地位を継ぎ、Hulāgu の遠征時にならぬに代つて Hulāgu 本隊の征服活動の側面援護にあたつたわけだ。Hulāgu Khān 時代の「Hulāgu 紀」以外には漢文史料に極めて断片的な記事があるだけであり、彼の Hulāgu 遠征以後の状況については全く解らない。

一方、Qūtūbqā は Qipchāq Khān 国軍との戦つて戦死したのは、既に述べた通り、一二六五年、Abāqā Khān の即位の一度一ヶ月後のことであり、彼が「Khān 直屬の Qarānās の万戸」の万戸長となつたのは Abāqā Khān の即位以前、Hulāgu Khān の時代と考えべきのはなからかと思われる。

この Sālī Nūyān は「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」を支配したのと、Qūtūbqā が「Abāqā Khān 直屬の Qarānās の万戸」を支配したのは共に Hulāgu Khān の時代で、ほぼ同時期であったり、「Abāqā Khān 直屬の Qarānās の万戸」は Hulāgu Khān 時代から誰か Abāqā の支配下であつたものと考えられるのである。

それでは、Sali Nūyan が支配する「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の一部が、Hulāgu Khan 時代に諸王 Abāqa と関係を持つに至つた契機は何であらうか。考えられる事は唯一つ、Abāqa が Hulāgu Khan の末年〔一二六三・四年頃〕<sup>(註)</sup> Khurāsān 地方の統治と守備の為に派遣された事実を除いて他には考えられなう。即ち、既に述べた通り、Sali Nūyan が支配する「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」は Hulāgu の遠征時に Hulāgu の指揮下に入りつつしたが、Abāqa が Khurāsān 地方の支配者として派遣されると彼等は Abāqa の指揮下に入り、これを Abāqa と「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の構成員たる Qarānās 達との結びつきが生じたに違ひないと考えられる。

それでは、この Qarānās 達の一部が Siikhūh, Baghdād をそれぞれ夏営地、冬営地とする「Abāqa Khan 直屬の Qarānās の万戸」の成員となつたのであらうか。

これについては「Ghazān 紀」の中に手がかりとなる断片的な記事がある。それは Khurāsān 地方の Nūrz の叛乱に対処した諸王 Ghazān が、Gardū の援軍を得て強力となつた Nūrz 軍との対決を避けて Isfarān 地方に來た時のことを記した叙述中に見られる次の記事である。<sup>(註)</sup>

《Ghazān のトミーン》Nūrz, Qutluqshāh, Sūzāi 等「Abāqāi の大千戸 (Hazāre-i buzurg) の為連れて來た総ての Qarānās 達が叛意を持ち、反抗して《東方へ》帰還することを相談していた」という情報を知らされた。

この記述を以て Abāqāi とは、Hulāgu の遠征時に來活躍し、Abāqā Khan 時代の末年、一二八〇年頃に

破した Qanqrāi 部族の有カミーン Abatāi Nūyān<sup>(註)</sup> のことであるが、彼がいつかは、一二六九年、Khurāsān 地方に侵入して来た Chaghatāi Khān 國の Barāq の軍隊と Abāqā Khān を戦じた時の Abāqā 軍の陣容を記した「Abāqā 紀」の記事は、

Abatāi Nūyān が中軍 (qul) を支配した。

とあり、また「Arghūn 紀」でも<sup>(註)</sup>

《Arghūn Khān は》トーン Qunchaqbal を認賞し、彼の祖 Abatāi Nūyān の職掌、即ち、中軍 (qul) の支配権を彼に与えた。

とあり、彼が Abāqā Khān の中軍 (qul) を支配したミールであったことが知れる。

この「Abatāi の大干戸」とは、「Abatāi Nūyān が支配した Abāqā Khān の中軍の千戸 (親衛千戸)」に相違なく、<sup>(註)</sup> ちまた挙げた「Ghazan 紀」の断片的な記事は、Abāqā Khān の直屬軍である「中軍の千戸 (親衛千戸・大干戸)」のために、Qaratūns 達が東方から連れて来られた事実があつた事を示していると思われる。そして、Abatāi Nūyān が一二六九年に「Abāqā Khān の中軍の千戸」を支配してゐた事から考へて、Qaratūns 達が東方から連れて来られたのは、一二六五年、Abāqā が即位の爲、任地の Khurāsān 地方から Adherbaijān に戻つた時のごとく、たゞ、間違いないであらう。

「Abāqā Khān 國威の Qaratūns の万戸」<sup>(註)</sup> Abatāi Nūyān が支配した「Abāqā Khān の中軍の千戸」の場合と全く同様で、一二六五年、Abāqā が Khurāsān から Adherbaijān に戻つた時、任地の千戸の支配とたゞ、

Qarānās 達の一部を同行し、己の采邑に入る直屬の万戸としたものと理解される。おそらく初代万戸長の Qutū-būqā は Abāqā Khān の即位以前から Khurāsān 地方でこの軍隊の指揮にあたっていたものであろう。

やつ、[Khān 直屬の Qarānās の万戸]は Abāqā が即位の為任地の Khurāsān 地方から Adherbaijan に戻る時、東方から連れて来た Qarānās 達によつて構成されていたことが判明したわけであるが、それでは [Khurāsān 地方の Qarānās の万戸]と諸王 Abāqā の Khurāsān 支配との間にはどのような関係があつたのであろうか。

Abāqā の Khurāsān 支配時に関する具体的な記事はほとんど見当らなうが、「Bisutū 部族考」に唯一ヶ所次の様な記事がある。<sup>(註)</sup>

《Jebe の弟は、[Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊]の第二代万戸長《Munkdū Sātū》のもとに《Tālūi Khān の身辺に仕えつゝだ。Munkdū は七人の息子がおり、年少の《息子》は《Urus とつゝ名》の者がふたが、《彼は》《kezik の qūji とつゝ Halāgu Khān に仕えつゝこの地 [Iran] にやつて来た。(中略)》とつゝ《Halāgu Khān の末年》《Abāqā Khān を Khurāsān 地方》の支配者《に指名した時》Urus を四佐薛の長 (amir-i chahār kezik) と任命して強力な権限を与えた。<sup>(註)</sup>》とつゝ Abāqā Khān が王 [Khān] となり Khurāsān から帰還する時、Urus を引き返りやつ、Herāt を Bādghīs の辺境の守備の為に派遣し、その地方の軍隊を彼に支配させた。

この記事は、Halāgu Khān 弟はつゝ Khurāsān に派遣されたつゝだ Abāqā が一二六五年、Khān 位に就く為 Adherbaijan に戻る時、[Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊]の第二代万戸長 Munkdū の息子は、側近

の有力ファミリーとして Abāgā と同行してつた Bistū 部族のファミリー Urus が Khurāsān の守備の為に Badghis 地方に派遣されて当地の軍隊を支配したことを記したものである。この見えを Urus が派遣された Badghis 地方が、既に述べてきたように「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸・千戸」の駐屯地であったこと、また「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の第四代万戸長 Sañ の息子 Aladu が Khurāsān 地方で Qarānās の軍隊を支配してつたこと等から考えて、Urus が Badghis 地方で支配した軍隊とつうのは Khurāsān 地方に留つた Qarānās の軍隊の一部であつたと想像される。この Urus については「本紀」中に全く記事がないが、第二章で述べた Hindu Brikijī, Nuruz, Nikipai, Aladu 等 Khurāsān 地方で Qarānās の軍隊を支配したファミリー達との具体的な関係については知ることが出来なう。しかし、Hindu Brikijī などのファミリー達の多くは Urus と同様 Abāgā の Khurāsān 支配と同行した側近の有力ファミリーで、Abāgā の Adherbajān 掃蕩後、Khurāsān 地方で留り、Qarānās の軍隊を支配して当地の守備にあたつた者達とみて間違ふなうであらう。しかして「Khurāsān 地方の Qarānās の万戸」が、Abāgā が Khan 位に上つて任地の Khurāsān から Adherbajān と果す時、己の支配下にあつた Qarānās 著の一部を側近のファミリー達に支配をせよ、Khurāsān 地方の守備軍団としたもので、その起源は「Khan 直屬の Qarānās の万戸」と同様 Abāgā の Adherbajān 掃蕩時であつたと考へられるわけである。

以上のことから見て、「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」と、*II* Khan 國史料に見えぬ Qarānās  
〔*IKhān* 直屬の Qarānās の万戸〕、〔*Khurāsān* 地方の Qarānās の万戸〕、*II* Khan 國東方边境の盜賊

Qarānūs 集団」。』との關係がどうして最終的には次の様で云えると思ふ。即ち、[Hūlāgu Khan 時代の末年、Hūlāgu の息子 Abāqā が Khurāsān 地方の支配者として派遣された時、以前は Hūlāgu の指揮下であつて彼の征服活動の側面援護にあたつた Saīh Nūyān 率ゐる『Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊』は Abāqā の支配下に入ることにたり、この軍隊の構成員である Qarānūs 達と Abāqā との結びつきが生じた。<sup>(82)</sup>そして一二六五年、Abāqā が Khān 位に上つて Adherbāijān を戻つた時、Qarānūs 達のうち Abāqā との結びつきが特に強かつた一部の者達は Abāqā と同行して西方に移り、Abāqā Khān 直屬の『Qarānūs の万戸』や、『中軍の千戸（親衛千戸・大千戸）』の構成員となつた。そして、『Abāqā Khān 直屬の Qarānūs の万戸』は Abāqā Khān の采邑の中に入り、Siākhūh, Baghdād をそれぞれ夏營地、冬營地とする直屬軍として Abāqā Khān のオールドに仕え、Abāqā Khān 側近の三人のマイール Qūtūbqā, Sun'atī, Hūlqūtū が順次万戸長としてその支配にあたつた。その後、この『万戸』は Arghūn Khān の采邑に入る直屬軍となり、万戸長の地位は Tughāchār に受け継がれ、前代同様 Siākhūh, Baghdād に駐屯し、そのその後、Ghazān Khān の采邑に入り、Alādū が支配することとなつた。一方、Abāqā は、彼と同行しなかつた Qarānūs 達を二つの『Khurāsān 地方の Qarānūs の万戸』にまとめ、彼の息のかかつたマイール達を万戸長に指名して支配にあたらせ、Khurāsān 地方の守備軍団とした。しかし、これらは辺境にあつた為か、次第に万戸長の私兵的性格が強くなつて Hūlāgu 家に反抗するに至り、その過程で『万戸』は小集団に分裂していつたが、一二九四年、万戸長 Nārūz の投降後には Qarānūs の小集団の多くも諸王 Ghazān のもとに投降し、これらは Ghazān の即位後、『Khān 直屬の Qarānūs の万戸』の



万户長となった Aladu のもとに統合され、Aladu が二つに分れていった父 Sali Nayan の軍隊を一つに合せて回復することとなった。そしてまた、Abaga Khan の時代に II Khan 国東方辺境に侵襲した『盜賊 Qarātūnas 集団』の成員は、『Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊』の兵員と現地との混血児達であるという点では、『Khan 直属の Qarātūnas の万户』や、『Khurāsān 地方の Qarātūnas の万户』の成員達と全く同様であったが、Hulagu Khan 時代の末年、Abaga が Khurāsān 地方の支配者として派遣された時点において、彼等は既に II Khan 国東方辺境に自立化していった為 Abaga の支配下に入らず、Abaga Khan の即位後もそのまま東方辺境で掠奪行為を行っていた者達である」と。

ここに、(1)及び(2)の問題が解決したが、次に(3)の“Qarātūnas”の語義について簡単に触れておきたい。

Marco Polo は、「Qarātūnas というのは、彼等の言葉でモンゴル人とインドの女との混血児を意味するものである」と述べている。今までの考証を明らかなように、II Khan 国史料に見られる Qarātūnas は、確かに「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」のモンゴル人の兵員と現地との混血児であった。しかしながら、蒙古語で「混血児」を意味する語は「kholičara」であり、「Qarātūnas」という語そのものが『混血児』を意味する言葉である」という点に関しては Marco Polo の記事を受け入れることは出来ない。

「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の兵員と現地との混血児達が、特に“Qarātūnas”と呼ばれるのは外見的特徴によるものと思われる、その語も外見的特徴を表わしたものと想像される。おそらく Qarātūnas 達 はインドの女と混血して一般のモンゴル人より色が黒かったに違いなく、“Qarātūnas”の“qara”は、蒙古語で

「黒」を意味する「khara」の対音と考えられる。また、榎一雄教授の示唆されたところによれば、「unās」、「una」、  
「una」は「匈奴」の対音で、「Qarātūnās」とは「黒匈奴」を意味するものではないかとのことである。Qarātūnās  
達は、Khanの直屬軍となつた事実や、既に挙げた『Wassaf史』の記事から見ても解るように、特に勇猛だつた  
に違はなく、その為、匈奴に比せられ、色が黒いという外面上の特徴とあわせて“Qara-unās”(黒匈奴)と呼ばれ  
たのではなからうか。Qarātūnāsの語義については様々の説があるようだが、榎教授に従つて以上のように考える  
のが一番妥当であらう。

## 結 び

さて、今までの四つの章での考察により、II Khan 国史料に見られる Qarātūnās の本体、Qarātūnās 達と II Khan  
国との関係、Qarātūnās の語義について一応の結論が得られた。最後に、II Khan 国史上における Qarātūnās 問題  
の意義と、Qarātūnās の軍隊の Ghazān Khan 時代以後の状況について簡単に述べて結びとしよう。

既に述べたように、Sālī Nūyān の息子 Alādu が Ghazān Khan 時代、Tughāchār の後を受けて「Khan 直  
屬の Qarātūnās の万戸」の万戸長となり、Khurāsān 地方の Qarātūnās の小集団をも統合して、かつて父の支配  
してゐた「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の大部分を回復したが、このことはどのような意味を持  
つものかであるか。この問題については Alādu の前任者、「Khan 直屬の Qarātūnās の万戸」の第四代万戸長  
Tughāchār について知らねばならぬ。

Tughachar だ、既に述べた通り、もとほ Abāqa Khan の親衛兵<sup>(27)</sup>であつたが Arghūn Khān の即位後、「Khān 直屬の Qarānās の万戸」の第四代万戸長となつた。そして、一二八八年頃には Arghūn Khān の「采邑の諸地方 (valāyat-i injū)」の支配権を Argūn Khān から奪つたといふ<sup>(28)</sup>。Argūn Khān の采邑に入つた「Khān 直屬の Qarānās の万戸」の支配権を、Arghūn Khān の「采邑の諸地方」の支配権を得て強力となつた Tughachar は Arghūn Khān 時代の末期から Ghazān Khan 時代に在るまでの間、常に Khān 位継承争ひの主役を演じ、多くの陰謀や裏切り行為を重ねて来た。彼の最初の陰謀は Arghūn Khān の歿する直前、Arghūn Khān の信任の厚かつたマミーン Jushi, Qūjar, Urdūgatai や Sa'd al-Dūla を殺したことであつた<sup>(29)</sup>。彼はこの行為の爲、Arghūn Khān の息子 Ghazān を怒だ、Arghūn Khān の歿後、諸王 Bardū の即位を支持したが成功せず、結局即位した Gaikhātu Khan を許さねつ仕えることとなり、Gaikhātu Khan の有力マミールの一人となつた<sup>(30)</sup>。そして今度は諸王 Anbarji<sup>(31)</sup> 擁立の陰謀を企てて失敗し、捕えられたがまたもや許された<sup>(32)</sup>。そしてその後、秘かに Bardū と結んで Gaikhātu Khan を裏切り、Bardū Khan 即位後は彼の有力アミールとなつたが、同じく Bardū Khan の有力アミールで Qonkqian 部族の万戸長 Tudajū と対立し、その為 Bardū Khan を裏切つて Khurāsān 地方から進軍して来た諸王 Ghazān のもとに米降したのである<sup>(33)</sup>。そして、この Tughachar とほとんど行動を共にしてゐたのが、Qarānās を主体として構成されてゐた「Abāqa Khan の甘軍の千戸 (親衛千戸・大千戸)」を Arghūn Khān 時代に受け継いだ Qunchaqbal<sup>(34)</sup> だ、彼もまた Tughachar 同様、もとほ Abāqa Khan の親衛兵であつた。彼等が Khān 位継承争ひに際して常に中心的役割を演じて来たのが、「Khān 直屬の Qarānās の万戸」や、「Khān

の中軍の千戸」の兵力を背景としていたからに他ならぬ。<sup>(137)</sup>つまり、「Khan 直屬の Qarānās の万戸」や、「Khan の中軍の千戸」など Qarānās 達を主体として構成されていた Khan の直屬軍が、「Khurasān 地方の Qarānās の万戸」と同様 Arghun Khan 時代の末から万戸長や千戸長の私兵的性格が濃厚になつていたのである。ただ、「万戸」、「千戸」としてのまとまりはそれらが Khan の直屬軍であつた為強く、従つてそれらは解体しなかつたのであろう。

一二九五年、Khurasān 地方から Adherbaijan に進軍して Baidu Khan を倒した Ghazān が最初になすべき事は、云うまでもなく、Arghun Khan 時代の末年から続つてゐるマミール間の勢力争いとからむ Khan 位継承争いの病根を断つ事であつた。Ghazān は Baidu Khan を処刑した直後、Baidu 側につつた Qunchaqbal を処刑し、<sup>(138)</sup>即位の直後には、「口のもとに米降してつた Tughachar を Rum に左遷し、その数ヶ月後には当地で暗殺させた。<sup>(139)</sup>」<sup>(140)</sup>「Khan 直屬の Qarānās の万戸」や、「Khan の中軍の千戸」など Qarānās 達を主体に構成されてつた Khan の直屬軍は完全に Ghazān Khan の支配に入ることとなり、<sup>(141)</sup>やがて Khurasān 地方で米降した Qarānās の小集団とあむせつ、<sup>(142)</sup>かいつ Saih Nūyan が支配してつた「Hindustān, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」の大部分が Ghazān Khan のもとに統合された。そして、Khurasān 時代から Ghazān に仕えて功のあつた Saih Nūyan の息子 Aladu がこの軍隊の支配にあつたことになつたのである。つまり、Ghazān Khan 時代に Aladu が「Khan 直屬の Qarānās の万戸」の万戸長となつ事は、単に第四代万戸長 Tughachar の後を受けて第五代万戸長となつたというだけのものとははなはだしく、Ghazān Khan が、長く続つてつた Khan 位継承争い

の病根を断つて統一活動の第一歩を踏み出した重要事件として理解されねばならぬ。

それでは、Abaga Khan は何故 Qarānūs 達を己の直屬軍としたのであろうか。これらについては II Khan 国成立の事情に関連する II Khan 国の体質の問題として捉えることが出来ると思ふ。即ち、初代 II Khan の Hulagu は、本来は遠征軍の総司令官であり、征服後 Tulu 家の采邑となる Iran の地を Mankku Qaan の委任によつて支配する「総督」であつた。従つて、彼がモンゴリアから率いて来た多くの部族軍や、遠征に際して彼の指揮下に入つた「Adherbajān 軍政府」、「Hindustan, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」、「Khurasan 総督府」等、Uktai Qaan 時代のモンゴル帝国の出先機関に起源を持つ諸勢力は、あくまで征服活動に際して Hulagu の指揮下に入つただけのものであり、大部分は Hulagu 個人の軍隊ではなかつた。<sup>(8)</sup>ところが、征服活動を進めている最中の二二五九年、Iran 征服を命じた Mankku Qaan の計報が入り、統つて Qubilai と Arigbuka との間で Qaan 位継承争いがおこり、一方、征服地を窺う Mamluk 朝の軍隊や Qipchaq Khan 国の軍隊でも対処せねばならず、やむなく Hulagu は帰国を断念し、Iran の地に留ることとなつた。ここに、本来は Iran 遠征軍の総司令官で、征服活動終了後には Mankku Qaan の委任による「Iran 総督」となるはずであつた Hulagu を初代 II Khan とするモンゴル政権、II Khan 国が成立することとなつたが、上述のごとく、II Khan 国の中核となる諸勢力の大部分は Hulagu 個人の軍隊ではなかつた為、建国当初から Khan 権力の基盤は必ずしも強力なものとは云えなかつたのである。一二六五年、征服活動が一段落して間もなく Hulagu が歿し、息子 Abaga が即位するに際し、任地の Khurasan 地方で結びついた Qarānūs 達を連れて来て己の直屬軍としたのも Khan 権力の強化をはかつたもの

に他ならぬ。

Hulagu の征服活動の後を受けたこの Abaqa Khan の時代では、Qipchaq Khan 國、Chaghatai Khan 國、Mamluk 朝等、敵國の侵入が続き、これに対して結束して対処しなければならず、Abaqa Khan も Il Khan 國の中核をなすモンゴル諸勢力との間には特に問題は生じなかつたが、一二八二年、Abaqa Khan が Il Khan 國を一応安定させて歿すると、建国時から根柢していた分立的要素が Khan 位継承争いとマミール間の勢力争いからんで表面化しはじめて混乱状態が続き、その間に、Hulagu 遠征軍の中核であつた各部族軍や、Ukrai Qatan 時代の出先機関に起源を持つ諸勢力などが自立的傾向を強めていつた。そして一二九五年、Khurasan 地方から進軍して Baidu Khan を倒し、Khan 位にいつた Ghazan は、子飼いのマミール達を己の手足とし、これら自立的傾向を強めていた諸勢力のうち、まず、二つに分れていつた「Hindustan, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」〔Qarānās の軍隊〕を一つに統合して Khan 位継承争いの病根を断つと、次いで、半ば独立的な存在となつていつた Hulagu 遠征軍中核の諸部族を徹底的に滅し、つらた、「Adherbatijan 軍政府」や、「Khurasan 総督府」の後裔達を根絶やしにし、その上、Khan 位を争ひ得る多くの諸王達をも殺し、つらた Ghazan Khan は子飼いのマミール達を中核とする Il Khan 國史上極めて画期的な統一政權樹立に成功したのである。<sup>(原)</sup>

つらた Abaqa Khan の即位時に二つに分れた「Hindustan, Kashmir 方面駐屯の二万の軍隊」〔Qarānās の軍隊〕が、紆余曲折を経た後、Ghazan Khan のもとで統合された事は、「建国時の事情で根柢を Il Khan 國の分立的體質と、これを克服して行なわれた Ghazan Khan の統一活動の一断面」として理解されるべきものなのであ

る。

さて最後に、統合されて Ghazān Khān の采邑の中に入った「Qarānās の軍隊」の、Ghazān Khān 時代以降の状況について簡単に触れておこう。

Ghazān Khān 時代、統合された「Qarānās の軍隊」を支配したのは Alādū であつたが、「Tātār 部族考」<sup>(87)</sup>は、

Alādū には二人の息子がいた。一人は Khurāsān に駐屯する Qarānā の軍隊のムシーンである Baktūt であり、一人は Ghazān Khān のもとに仕えようとする Dalgak である。

つまり、Alādū の嫡子 Baktūt は Ghazān Khān 任せで Khurāsān 地方で Qarānās の軍隊を支配しようとしたことが判る。

また、Alādū 自身についても、Ghazān Khān 即位の数ヶ月後の事を記した「Ghazān 紀」の記事<sup>(88)</sup>で、  
六九五（一二九五—九六）年（中略）、ムシーン Alādū が Khurāsān 地方から到着し、当地の状況を奏上した。

とあつて、彼が Ghazān Khān の即位後 Khurāsān 地方でいたことが判る。彼の息子の Baktūt が Khurāsān 地方で Qarānās の軍隊を支配していた事実とあわせ、Alādū が Ghazān Khān の即位後、統合された「Qarānās の軍隊」の主力を支配して Khurāsān 地方に駐屯していたことは間違いないであろう。

Alādū については、右に挙げた以後の時代の記事は見当らず、その歿年も不明であるが、息子の Baktūt は

Ghazan Khan 時代に続く Ujratu Khan (在位一三〇四—一三〇六年)や Abu Sa'id Khan (在位一三一六—一三二五年)の時代に Khurasan 地方に駐屯して非常に有力であった事が知られており、父 Alaidu が支配していた「Qarānās の軍隊」の支配権を継承したものとと思われる。しかしながら、Ghazan Khan 時代以後、Khurasan 地方の支配は必ずしも安定していなかった為、この Bakhtur と Ujratu Khan の歿後から次第に自立的傾向を強めていき、Chaghatai 系の諸王 Yasaur と結んで Abu Sa'id Khan と反抗したが、結局、一三二〇年頃、Yasaur の部と達がその主に背いた時、Bakhtur は最初に殺された。<sup>(註)</sup>おそらく、「Qarānās の軍隊」もこの時に解体してしまつたと考えられる。

また、Timur 朝の史料にも Mughūlistān のギョール人が Māvārā' al-nahr のチャグタイ・トルコ人を軽蔑して呼んだ語として Qarānās の名が見うけられる。おそらくこれは Bakhtur が殺されて解体した U Khan 時代の「Qarānās の軍隊」の後裔達そのものを呼んだものではなかつたであろうが、それらも含まれてはいたのであると思われる。一九七〇・一二・三〇 (東京大学大学院学生)

注

XV, St. Petersburg, 1888.

(一) 本稿で用ゐる『集史』の校訂本と、その略記は以下の如くである。

Rashid 3: E. Blochet, *Diāmi al-Tavārikh par Fādī Allah* Rashid ed-Din, Tom II, Leyden & London, 1911.

Rashid 1: Jāmi' al-Tavārikh I, ed. by A. A. Alizade etc., Moskva, 1965.

Rashid 4: Jāmi' al-Tavārikh III, ed. by A. A. Alizade, Baku, 1957.

Rashid 2: I. N. Berezin, *Sbornik Iytopisei, Trudy*Rashid 5: K. Jahn, *Ta'rih-i-Mubarak-i-Gāzani des*





- (21) Herat の北方であたる。
- (22) 『集史』中の“Dastan-i-Khan”を“一(Khan 本)紀”と訳す。たゞをば「Ghazan 紀」とする如くである。本稿中“一紀”ともあるのは、総て『集史』の「本紀」を意味する。
- (23) 史料には「Qarūnas の万戸軍」とも、「Qarūnas の万戸」とも記されているが、本稿では引用文以外「Qarūnas の万戸」と統一する。
- (24) Rashid 5: p. 48.
- (25) 原文には“Abagha”ともあるが、『集史』の他の校訂本で一般的に“Abagā”に改めた。以下、本稿では総て“Abagā”と統一する。
- (26) Rashid 5: pp. 57-58.
- (27) Hülagū の遠征時と活躍し、その後 Adherbaijān 地方で有力だった Jalāir 部族のメンバー。
- (28) 『Wasāfī 紀』: pp. 277-278.
- (29) Rashid 6: pp. 64-65.
- (30) 「Arghūn Khan の諸兵を Ghazan の手にとり送り届ける Ghazan の諸物資、財宝を Ghazan に返還し、また Ghazan の勢に範田を Sefīdrūd なる Trāq, Khurāsān, Qūmus, Mazandarān 及び Fars の半々に割譲の詔を賜ふこと」及びその Rashid 6: p. 64.
- (31) 原語 injā. この語は、「王室領」「王室領の民」を意味するが、この場合は後者の用法である。
- (32) “Ghazan Khan”ともあるが、むしろこの時まで Ghazan は Khan 位とごうてはいない。
- (33) Jürmāghūn の Iran 遠征の時期とごうては、「聖武親征録」(王国維『蒙古史料校注四種』台北 一九六一年)一〇一頁で、「戊子(一二二八年)太宗皇帝(Ölkai) 與太上皇(Tulu) 共議遣擲力蠻(Jürmāghūn) 復征西域。」また「Sunit 部族考」(Rashid 1: pp. 150-151.) に「Jinkiz Khan の歿後 Bürke を Jebe を Sübarai のより(中路) Jürmāghūn を四方の鎮撫軍の長と指し、Iran に向ひて出發せしむ」とあり、Tulu 監國時代の一二二八年に出發したものと知れる。
- (34) Rashid 1: pp. 156-157.
- (35) 一二四一年の事。
- (36) 『Wasāfī 紀』: p. 239.
- (37) Rashid 5: p. 50, 58.
- (38) Kurt 家とごうては、本田実信「クラートのセルト政権の成立」(『東洋史研究』二二—二、一九六二年)に詳しく記されている。
- (39) Rashid 5: p. 35.
- (40) 『Wasāfī 紀』: p. 148.



- (18) Rashid 5: p. 36.  
 (23) A. C. Moule and P. Pelliot: op. cit., vol.1, pp. 121-122.  
 (22) Marco Polo 著『Reobar の年鑑』を記すところ。  
 (27) 英訳原文 Great Kaan.  
 (28) 英訳原文 Badascian.  
 (29) 英訳原文 Chescemir.  
 (28) 英訳原文 Curmos.  
 (22) Chaghatai の或つ Mūchi Tpe の或つ。Rashid 3: pp. 158-159.  
 (22) Rashid 5: p. 14.  
 (26) Rashid 5: p. 35.  
 (16) Rashid 5: p. 36.  
 (22) 「Chaghatai 記」を著「Chaghatai の集」に Mūtānkān の集団に Qarā Hālagū のに Muḥarrakshāh のに Dīchāi-bāgā』を著。Rshid 3: p. 173.  
 (23) D'Ohssoon 著『國權の圖』の附の文を記すところ。D'Ohssoon: op. cit., vol. 3, p. 516.  
 (27) Rashid 6: p. 123.  
 (25) この記を記すところ「Chāzān Khān 世に Tāram 地方に住居せられた Qarāūnas』を記す。次章の節に詳に触れる。

(29) なお本稿に於ては Nikūdayān 著『Abāqā Khān 時代に解体せられた Chaghatai 家派譜の Nikūdar の軍隊の殘党』その他の Chaghatai 家の軍隊は Il Khān 國東方邊境を自文化したものである。D'Ohssoon の記事は著の (D'Ohssoon: op. cit., vol. 3, pp. 379-380.) Nikūdayān 著『Hūlagū Khān の時代に Il Khān 國の Qipchāq Khān 國との間に戦った戦』Hūlagū の遠征に際して Jūi 家なる派譜を記した軍隊の「源流」Negoudar, Ongoudia の「源流」を記した Khurāsān 地方の道を記した著の Ghazni 及びその國境方面に於ては著の「その派譜」(Boyle: op. cit., p. 353, 357. 戦国時代、前掲書「十七回」) なる『集史』及び『Wassāf 史』なるものは Negoudar, Ongoudia 以下の記事は其類なること。また、その本體中に於ては「Abāqā 記」の記事は著の「その派譜」Abāqā Khān の命令を受けた Arghūn の記述に據つた Nikūdayān 著 Chaghatai の後編に於ては「その」に「Abāqā 記」の記事は「十六(一七九一)年」Nikūdayān の派譜に Jaghatai のに Jūi の或つ Abdalla (Chaghatai 記) 及びその Abdalla 著 Chaghatai の集」に Mūtānkān の或つ Bāichū のに Tūdān のに Būchāi のに著。Rashid 3: p. 163.) を著した。その著『Chaghatai の源流』

Barāq の息子 Dūa が Abdalā を召喚して服従させ、自分の息子 Qutluqkhataja を彼の代りに送り込んだ。そして Qutluqkhataja が、七〇〇(一三〇〇—〇一)年、Pars 地方に軍隊を派遣して掠奪を行った。云々」(Rashid 5: p. 36)とあり、Nikudaryān は、やはり解体された Nikudar の軍隊の残党を主体とする Chaghatai 系の軍隊と見た方が良いのではなからかと思われ。

(97) Rashid 1: p. 189.

(98) Rashid 1: pp. 188-189.

(99) 原文は Hüqtür (قوتور) とあるが、後に明らかとなるように、هو は づ の誤りと考えられるので、あくまで Hüqtür と改めし記した。

(100) Rashid 4: p. 22.

(101) 前註(95)。(95)参照。

(102) 〇〇と〇「Khurasan 地方の Qarānās の万戸」は、万戸長達の Hulagū 家に対する反抗の過程を細分化したもので、Sah Nūyān 時代のものがその中、Alādū に継承されたとは思われない。

(103) 那珂通世訳註『成吉思汗實録』(東京、筑摩書房、一九四三年)による。

(104) Rashid 4: pp. 21-22.

(105) 原語“tama”。これについては、まだ多くの問題点がある。

残されているが、ここでは前後の文脈から、一応「鎮撫」と訳しておく。

(106) もちろん Dar Bahadır と同一人である。

(107) この部分は人名が欠けている。

(108) 前註と同じ。

(109) Sah Nūyān の前任の三人の万戸長達についての詳しい考証は省くが、初代万戸長 Dar は、『元朝秘史』の千戸長「蒼亦兒」(那珂通世、前掲書、一七六頁)、『集史』「Chinkiz 紀」第三章(千戸長表)の「Ukai 家の千戸長 Qanqatān 部族の Dar」(Rashid 2: p. 219.) と比定である。また、第二代万戸長 Munkdu は、「Bisri 部族考」の「Jebe」の弟 Munkdu Saur」(Rashid 1: p. 557) と、第三代万戸長 Hüqtür は、「Qanqrāt 部族考」の「Dei Nūyān の子、Alij Nūyān」(按陳那顔)の弟 Hüqtür (原文 Hüqtür) (Rashid 1: p. 394) とそれぞれ比定できると思う。初代万戸長の Dar は Jinkiz Khan の中央アジア遠征に参加したアミールであり、また、第二代万戸長 Munkdu の兄 Jebe や、第三代万戸長 Hüqtür の兄 Alij Nūyān も Jinkiz Khan の中央アジア遠征に参加して活躍したアミールとして知られている。つまり Sah Nūyān の前任者三人は、いずれも Jinkiz Khan の中央アジア遠征時に西方で活躍した部族のアミール

なであつた。

(110) 那珂通世、前掲書、五一四頁。

(111) 「二万」という部分の一致をあまり強調しすぎるのは適當ではないかとも思うが、全くの偶然の一致とは思えない。

(112) 『元史』卷三、憲宗紀下、「三年（一二五三年）、夏六月、命諸王旭烈兀及兀良合台等、帥師征西域、哈里發、

八哈塔等國、又命塔塔兒帶、撒里、土魯花等、征廓都思 [Hindustān]、怛失迷兒 [Kashmir] 等國」とある。

(113) 「Hindustān」には、はつきりとした年代は記されてゐないが、前後の記事から判断して、一二六三・四年頃と考へられる。Rashid 4: p. 91.

(114) Rashid 6: p. 28.

(115) Rashid 1: p. 396, Rashid 4: pp. 87-88, Rashid 5: p. 7, 10, 37.

(116) Rashid 5: p. 20.

(117) Rashid 5: p. 69.

(118) 「親衛の千戸」を示す語として、『集史』中では、「hazret-i qul (中軍千戸)」、(Rashid 6: p. 311), 「hazret-i khās (親衛千戸)」、(Rashid 2: p. 195), 「sar-qul (首中軍)」、(Rashid 2: p. 195), などが見られる。また、「qul-i buzurg (大中軍)」、(Rashid 6: p. 127), など

語も知られてゐる。

(119) Rashid 1: pp. 557-558. なお、原文には、「Isitū 部族」とあるが、もぎむんは「Bisit 部族」が正しい。

(120) 「Abāga Khan」とあるが、もぎむんこの時 Abāga はまだ Khan 位に上つてはゐなかつた。

(121) 元史兵志宿衛の条に、「四怯薛。太祖功臣博爾忽・博爾兀・木華黎・赤老温・時號撥里班曲律、猶言四傑也、太祖命其世領怯薛之長、怯薛者猶言番直宿衛也、凡宿衛、每三日而一更、申酉戌日、博爾忽領之、爲第一怯薛、即也可怯薛、博爾忽早絶、太祖命以別速部代之、而非四傑功臣之類、故太祖以自名領之、其云也可者、言天子自領之故也。」とあり、Jinkiz Khan の四傑が支配した四怯薛のうち博爾忽の支配した第一怯薛は、彼の歿後、別速(Bisit)部族の者に支配されたことが知れるが、Bisit 部族のアーメン・Ürüs が Il Khan 國で「四怯薛の長」となつたことはいつれと關係があるかもしれない。

(122) 前註(120)に同じ。

(123) この時、万戸長 Sahn Nuyān がどの様な状況であつたかについては史料が無く爲全く不明である。

(124) 前註(46)参照。

(125) Rashid 5: p. 70.

(126) Rashid 5: p. 79.

- (127) Rashid 5: pp. 80-83.
- (128) Hülagü の第十一十 Mankutümür のナ。
- (129) Rashid 5: pp. 84-85.
- (130) Rashid 5: pp. 88-89, Rashid 6: pp. 69-70.
- (131) 前註(13)參照。
- (132) 前註(9)參照。
- (133) D'Olsson は Wassaf の記事と擬して 'Gaiikhatü Khan の即位直後 Tughachar, Qunchaqbal などの軍隊の支配権を失つたことを記してゐるが (D'Olsson: op. cit., vol. 4, p. 84) Tughachar は Arghun Khan 時代の罪を許さないと 'Gaiikhatü Khan が述べたものと異なる。『Gaiikhatü Khan』と 'Tughachar は 'Gaiikhatü Khan を裏切つて Baidu のもとに逃げた時の記事で、『Tughachar』は『十戸長達』一編になつて Baidu のもとに逃げた。(Rashid 5: p. 89) とある。Tughachar は 'Gaiikhatü Khan 時代は 大軍を支配してゐたことが 手紙の D'Olsson の Wassaf を引くところから 'Tughachar は 'Gaiikhatü Khan の即位直後、口の軍隊の支配権を失つたことを 事實と見做したところから、それは 1 時的なものと考へられ、Tughachar は Arghun Khan 時代は Baidu Khan 時代に 終始『Khan 直屬の Qaratūās の下』の支配権を有してゐたと見ても可い。

II Khan 國史を記したる Qaratūās といふ 史料

- (134) Rashid 6: p. 86.
- (135) Rashid 6: pp. 96-97, pp. 101-102.
- (136) もつと 'Hülagü の采邑に入つてゐた軍隊もあつたが、征服活動に際して彼の指揮下に入つた總ての軍隊の中から見れば一部ではかすまなかつた。
- (137) Ghazān Khan の統一の過程について、'Ghazān Khan の第二章にかなり詳しい記事があるが、先行の諸「本紀」の記事が簡略であるため唐突の感が強く、Ghazān Khan が滅したモンゴル諸勢力は、建国以來いかなる状況に置かれたのか、また、Ghazān Khan 政権の中核を構成したのはいかなる者達であつたか、等、具体的な事を理解するためには「部族考」その他の微細な記事とあわせての考証を要する。従来これらの問題についてはほとんど考察されることがなかつたが、II Khan 國史上の重要問題の一つであり、稿を改めて發表したことを考へてゐる。
- (138) Rashid 1: p. 189.
- (139) Rashid 6: p. 102.
- (140) Häfz-i Abri: Dhanli Jamī' al-Tavarikh. ed. by Khān-Babā Bayanī, Teherān, 1939. pp. 64-113.
- (141) Häfz-i Abri: op. cit., p. 112.